セッション報告

第一部

「プロを目指して：私達の進路と夢」

テーマ１　「私の大学のここが好き」

テーマ２　「６年間で成長したことについて自由に話してみよう」

テーマ３　「１０年後の活躍している場面をイメージしよう」

第 1 部

World Café

プロフェッショナルを目指して：私達の進路と夢」

日本薬学会第6回全国学生ワークショップ

World Café とは？

World Café はグループワークの一つのやり方です。これから皆さんは、世界を旅する 「旅人」になります。

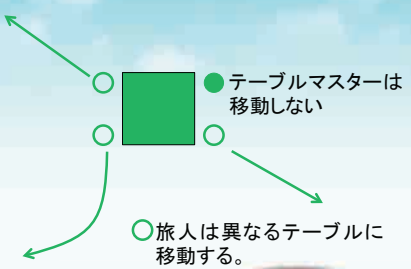
旅人は、出会った場所で“おしゃべり” や“落書き”をして、また別の場所に旅立っていきます。

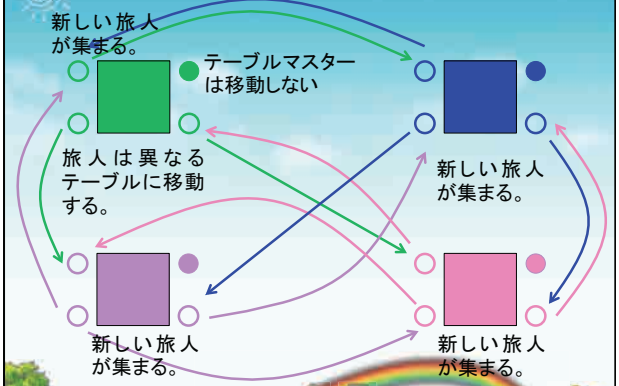
今日は、旅をしながら3回のおしゃべりや落書きをしましょう。

World Café の方法

- 4名くらいのグループで「おしゃべり（ラウンド）」を行いますが、テーマごとにメンバーを入れ替えます。
- テーブル毎に 「テーブルマスター」 を決めます。テーブルマスターは固定で、司会をします。
- 1回のラウンドは20分～30分で行います。ラウンドが終わると、旅人は別のテーブルに移動します。このとき、なるべく違う旅人同士が集まるように移動しましょう。

旅人の移動





テーブルマスターのお仕事

1. 各テーブルにおける「おしゃべり」が盛り上がるように工夫してください。
2. 第1ラウンドでは、指定されたテーマでの「おしゃべり」の司会をお願いします。
3. 第2ラウンド以降は、旅人の「自己紹介」の前に、テーブルマスターから「前のラウンド」で印象に残ったお話しを1分で紹介して下さい。その後、そのラウンドのテーマの「おしゃべり」の司会をして下さい。
4. 旅人は「おしゃべり」に夢中になる傾向があります。旅人に「落書き（気付きや感想）」をするように促して下さい。
5. 第1部の報告書（概要と感想 A4 1 枚）を担当して下さい。

模造紙の提出はありません。（旅人の落書き帳です！）

落書きはたくさんあるほど楽しいです！

World Café では…

- たくさんの旅人と知り合いになれます。
- ということは、いろいろな人の話が聞けます。
- いろいろなお話し（他花受粉）によって、新しい発想が生まれます。
- でも、「声の大きい人」の旅の軌跡が分かってしまいます。
- テーブルマスターは、ちょっと大変なので、旅人は「利他的」な行動をお願いします。
- 自由討論での発言は、一人　1分以内でお願いします。

今日の World Café のスケジュール

移動

10:45 ～ 11:05　　第 1 ラウンド

移動

11:10 ～ 11:35　　第 2 ラウンド

移動

11:40 ～ 12:15　　第 3 ラウンド

12:15　　昼食（4 階）

第 1 ラウンドのグループ編成

- 今から P のメンバーでグループを6つ作ります。
- P 会場を Café に模様替えしつつ、グループを作ります。少しだけお手伝い下さい。
- 時間の都合上、テーブルマスターはこちらで指名させていただきます。
- 旅人になった方は、各テーブルに移動して下さい。旅人の定員は3名です。

テーブルの位置とテーブルマスター

1 ○○ ○○ さん	2 ○○ ○○ さん	3 ○○ ○○ さん
4 ○○ ○○ さん	5 ○○ ○○ さん	6 ○○ ○○ さん

Welcome to
World Café Pharmacy

第1ラウンド

第1ラウンドのメニュー

10:45 ～ 11:05 （20分間）

テーマ:「私の大学のここが好き（過去）」

- 自己紹介を兼ねて、旅人は「私の大学のここが好き」を紹介して下さい（1人1分程度）。
- テーブルマスターが司会役をお願いします。
- 話しを聞きながら模造紙にはできるだけ気づきなどを書き残して下さい。

移動です

- 旅人は、旅に出て別のテーブルに移動して下さい。
- 第 1 ラウンドのメンバーと同じにならないように！
- 各テーブルの旅人の定員は3名です。テーブルマスターは人数を調整して下さい。

Welcome to
World Café Pharmacy

第2ラウンド

第 2 ラウンドのメニュー

11:10 ～ 11:35 （25 分間）

テーマ:「6年間で成長したことについて自由に話してみよう（現在）」

- テーブルマスターは、第1ラウンドで印象に残ったお話を紹介して下さい（1分）。
- 旅人は、自己紹介を兼ねて、第1ラウンドで印象に残ったことを話して下さい（1人1分）。
- 旅人は、「成長したこと」について発表して下さい 。
- 発表の後は、自由におしゃべりして下さい。
- 話しを聞きながら模造紙にはできるだけ気づきなどを書き残して下さい。

移動です

- 旅人は、旅に出て別のテーブルに移動して下さい。
- 第1、第2ラウンドのメンバーとは、できるだけ同じにならないように！
- 各テーブルの旅人の定員は3名です。テーブルマスターは人数を調整して下さい。

Welcome to
World Café Pharmacy

第3ラウンド

第 3 ラウンドのメニュー

11:40 ～ 12:15 （35分間）

テーマ:「10年後の活躍している場面をイメージしよう(未来)」

- テーブルマスターは、第2ラウンドで印象に残ったお話を紹介して下さい(1分)。
- 旅人は自己紹介、第2ラウンドで印象に残った話の紹介（1人1分程度）
- 「10年後に活躍している場面」を A4 用紙に絵で示して下さい(5分)。
- 絵だけをメンバーに見せて、まずはクイズ形式でメンバーに答えてもらって下さい。

歴史に残る絵は
期待していません。

説明は書かなくて結構です。

できるだけ場面を
描いてみましょう。

終了です！

絵を描いたA4 紙にチーム名・グループ名と名前（Ⅱ-A ○○)を書いてファイルに綴じて下さい。

これから4階で昼食です。

13時15分までに
3P 会場に集合して下さい。

ＩＡ班－１

第一部では「プロを目指して：私達の進路と夢」というテーマで World Café 形式で討論を行った。3~4 名のグループで、テーマごとにメンバーを入れ替えて「ラウンド」を行った。各ラウンドでの討論について以下にまとめる。

<第１ ラウンド>「私の大学のここが好き」
第１ラウンドでは私の大学の好きなところを発表し、印象に残ったことを模造紙に書いた。
・医療系の学部がある
・自然が多い
・医学部と共同で研究ができる
・運動設備が充実している

第１ ラウンドでは、上記のような意見がでた。薬科大学に比べて総合大学は学部間でのつながりがあるなど大学間での違いがみられた。特に医療系学部がある大学では共同で研究を行っているところもありこの話を聞いているときの薬科大学生がうらやましく思っていたのが印象的だった。１番多かった意見として自然が多いことであった。このラウンドのメンバーの大学（薬学部キャンパス）は山のほうにあり、動物がよく出るなどのあるある話で盛り上がり「薬学部山の中にある説」まで飛び出した。他にも地域の方に向けた薬草教室を行っているところもあった。このラウンドを通して他の大学の事をよく知れたと思う。

<第２ ラウンド>「６年間で成長したことを自由に話してみよう」
第２ ラウンドでは、６年間で成長したことを発表し、印象に残ったことを模造紙に書いた。
・よく勉強するようになった
・救急救命に詳しくなった
・コミュニケーションが上達した
・生き方上手になった

第 2 ラウンドで上記のような意見がでた。よく勉強するようになったが意見として多かった。みんなの意見を聞いているだけでも勉強している事が伝わってきた。なかでも救急救命サークルに所属している人がいて、その人は救急救命について勉強し知識を身に着けていて自分が大学で学んでいないことを学んでいたのでうらやましかった。他にも国際学会に参加するため英語を勉強したという人や、バイトを通じてコミュニケーション能力を伸ばした人もいてみんな大学生活で多くのことにチャレンジしていた。

<第３ ラウンド>「１０年後の活躍している場面をイメージしよう」
第３ ラウンドでは、１０年後の活躍している場面を絵で表現しクイズ形式でメンバーに答えてもらった。
・患者さんに寄り添える薬剤師

・ワクチン開発企業で働く薬剤師
・地域で身近な薬剤師
・症状から適切な漢方薬を提案できる薬剤師

第 3 ラウンドでは主に実務実習や大学での経験から述べられた意見が多く、みんな患者さん中心に考えていた。患者さんの気持ちやしてほしいこと感じ取れるようになりたい、新ワクチンを医師に説明するときに薬学的知識を活かしたい、患者さんの状態を見て適切な漢方薬を提案できる漢方薬のスペシャリストになりたい、この地域にはこの薬剤師がいるので大丈夫と言われるようになりたいとそれぞれの思いがあり、自分が想像もしていなかった薬剤師像を聞くことができた。

<プロを目指して：私達の進路と夢（World Café）全体を通して>
World Café を通して進路や夢、目標像というものを討論することができた。自分にはない考え方や意見が出てきてとても刺激を受けた。10 年後の自分の活躍しているところをみんなの前で発表したので 10 年後なりたい自分になれるように頑張りたいと改めて思った。この World Café ではテーブルホストを務めた。第 1 部ということもあってか最初はみんな緊張していたが時間が経つにつれてリラックスした雰囲気になり多くの意見が出てきたのでテーブルホストとしての役割は最低限できたと思う。

ＩＡ班－２

第一部では「プロを目指して：私達の進路と夢」というテーマで World Café 形式で討論を行った。3~4 名のグループで、テーマごとにメンバーを入れ替えて「ラウンド」を行った。各ラウンドでの討論について以下にまとめる。

<第 1 ラウンド>「私の大学のここが好き」
第 1 ラウンドでは、私の大学の好きなところを発表し、印象に残ったことを模造紙に書いた。
・学食がおいしい
・設備が綺麗
・学生の意見を取り入れてくれる
・学校が夜遅くまであいている
・先生とのコミュニケーションがはかりやすい

第 1 ラウンドでは上記のような意見がでた。施設面においては、私の大学は 10 時にしまるので羨ましいと思った。生活面では、学食が充実している大学が多く具体的に各大学どのような特徴があるのか興味を持った。それに加えて、学生の意見を積極的に学校の運営方針へ取り入れてくれる大学もあり魅力的に感じた。

<第 2 ラウンド>「６年間で成長したことを自由に話してみよう」
第 2 ラウンドでは、６年間で成長したことを発表し、印象に残ったことを模造紙に書いた。
・実習を通して患者さんと話せるようになった
・うまくコミュニケーションがとれるようになった
・高校の時より長時間勉強できるようになった
・研究をすることの大変さを知った
・効率がよくなった
・一人暮らしの技術が向上した

第 2 ラウンドでは上記のような意見がでた。人との関わりや医療に対する意識など実習中に成長したという意見が多かった。実習中は薬の知識だけではなく、患者さんや薬剤師の方などとのコミュニケーションも大切であり、そういったところも学べる場となったことから皆充実した実務実習だったと話していた。大学生になり一人暮らしを始めた人が多く、大学に入ってから自立できたといった話もあった。

<第 3 ラウンド>「１０年後の活躍している場面をイメージしよう」
第 3 ラウンドでは、１０年後の活躍している場面を絵で表現しクイズ形式でメンバーに答えてもらった。
・博士号をとり専門薬剤師になる
・病院薬剤師として働き、学生実習を担当する
・病院薬剤師として患者に寄り添う
・薬局薬剤師で、全国転勤型勤務で活躍したい

第 3 ラウンドでは 10 年後に活躍している姿について話し合った。10 年後の目標にとどまらず、個々の将来の夢についてまで共有することができ非常に有意義な時間を過ごすことができた。来年度より別々の場所で働くことになるが現在の高いモチベーションを維持していきたいと考える。

<プロを目指して：私達の進路と夢（World Café）全体を通して>
World Café を通して、それぞれの環境で学んできた薬学生と共通の話題で会話をすることにより、様々な考え方を聞くができて本当に良い刺激になった。どのラウンドでもとても話しやすい雰囲気でみんなと交流を深めることができた。

ＩＢ班－１

セッション第一部では、「プロを目指して：私たちの進路と夢」というテーマで World café 形式を用いて討論を実施した。以下の 3 つのラウンド（おしゃべり）にそれぞれ小テーマが与えられ、そのテーマに対する自分の意見を交換した。各ラウンドでの討論について要旨を報告する。

第 1 ラウンド：「私の大学のここが好き（過去）」

・門が広く、社会人の受け入れが多い。
　その結果、社会人経験者が多く、30 歳以上の人やママさんもいる。
　（社会人入学しやすい → 試験が小論文、面接、一般常識であり、いわゆる数学・化学などがない）
・総合大学で、他学部・他職種とのつながりがある。
・総合大学で、医歯薬保健学科があり、他の医療系職種とのつながりもできる。
・とりあえず大学が広い。（地下鉄 2 駅分）
・学部、学科を問わず、1 年間は大学の近くで寮生活。
・大学教員との距離が近く、進路相談がしやすい。
・学年の人数が少なく、みんな知り合い。→ つながりが強い。

第 1 ラウンドでは上記のような意見がでた。さまざまな大学の学生と話し合うことで、同じ薬学部なのに、内部の環境は全然違うということを感じた。どの大学もそれぞれ特色があり、みんなが自分自身の大学に誇りを持っていて、自分の大学が好きだということがよくわかるラウンドだった。

第 2 ラウンド：「6 年間で成長したことについて自由に話してみよう（現在）」

・薬学的知識の面でも成長したが、それよりも人間性が大きく成長したと思う。
・バイトなどを通して、自分のことは自分でやるという、自律・自立。
・大学生は自由、やりたいことができる。
・サークル、部活、研究室における上下関係。（教える側、教えられる側）
・実務実習での経験が大きかった。→ 将来の進路選択へ
・実務実習にもう少しはやく行きたかった。
・プライベートな部分では、カラオケの点数がのびた、お酒に強くなった。

このラウンドでは、この 6 年間で人間性が大きく成長したという意見が多かった。大学生になり、自分のことは自分でやるようになった。例えば、アルバイトでお金を稼ぐようになり、自分で稼いだお金をどう使うか、ということなど自由が増えた（自立）。自由が増えたからこそ、自分自身で後先考えて行動することが多くなり、人間性が成長した（自律）。

また、実務実習での経験も大きく、将来の進路について考える機会となったようだった。人間性、薬学的知識、いずれにせよ、6 年間でみんながどのように成長したのか、自分がどう変わったのかを明らかにした討論だった。

第 3 ラウンド：「10 年後の活躍している場面をイメージしよう（未来）」
※第 3 ラウンドでは「10 年後の活躍している場面」について A4 用紙に絵を描いて表現した。
・本当に必要な薬は何なのか、本当に求められている薬を選択する。（行政）
・NO と言える薬剤師に、処方提案・変更ができる。（病院）
・専門薬剤師をとっている。（病院）
・患者さんが求めていること、必要としていることに気付けるような薬剤師。（病院）
・かかりつけ薬剤師で人気者。（薬局）
・幸せな家庭。

このグループでは、全員すでに就職先が確定しており、その就職先での 10 年後イメージした討論が行われた。病院という同じ臨床現場に就職するのに、やりたいこと、目指していることは、それぞれ違った。みんながなぜその就職先を選択したのか、その場で何をして、どう在りたいのか、どのように活躍していきたいか、というのがよくわかる討論であった。10 年後、みんながこのイメージのように活躍していることを期待している。

総括
World café を通して、過去→現在→未来という時系列で、自分自身を振り返り見つめ直すと同時に、将来についても考えることができるいい機会になった。また、第 3 ラウンドでは自分が描いているイメージを実際に「絵」として相手に伝えることで、より明確にすることができた。さらに、他の学生の意見や夢・将来像を聞くことで、自分とは異なる価値観に触れることができ、各々がいい刺激を受けることができたのではないかと思う。

ＩＢ班－２

第 1 部では、「プロを目指して：私たちの進路と夢」について World Café 形式で討論を行った。Café ということでコーヒーやジュースを飲みながらメンバーを旅人になぞらえテーブルを旅し、テーブルマスターを含む 4 人で与えられたテーマについて、20～30 分自己紹介を兼ねた話し合いを行った。

第 1 ラウンド：「私の大学のここが好き」
第 1 ラウンドでは自分の大学について話し合った。6 年間通っている大学ではあるが、好きなところといわれると挙げるのが難しかった。単科大学では「大学自体が小規模なので上下の関係性が濃い」、「生徒同士の距離が近い」などの意見があり、一方総合大学では「様々な学部の人がいるため多様な考えを持つ人がいる」、「薬学以外の医療関係について知ることができる」とそれぞれの大学によって特色があるようだった。

第 2 ラウンド：「6 年間で成長したことについて自由に話してみよう」
第 2 ラウンドでは大学 6 年間で成長したことについて話し合った。大学は高校に比べ学年や学

校全体の規模が大きいため様々な人に出会うことができる。そのため、「カルチャーショックも受けたがいろんな人を受け入れることができるようになった」、「他人の話に共感できるようになった」などの意見が挙げられた。また、勉強についても話題にあがり、「薬学の知識が身についた」「専門的な英語が読めるようになった」なども挙がった。
最後には6年間薬学について学んできたからこそそれぞれ国家試験には合格しよう、という結論に至った。

第3ラウンド:「10年後の活躍している場面をイメージしよう」
第3ラウンドでは、「10年後に活躍している場面」をイラストで表現し、他の人に描いた絵の内容を当ててもらうことから始まった。すでに病院や薬局に内定をもらっている人もいるため、実際の進路に沿った話が多かった。臨床薬剤師としては「患者さんだけではなく、他の医療従事者からも必要とされる薬剤師」、「薬局で他の薬剤師が必要とする勉強会などを積極的に行う薬剤師」、「患者さんに寄り添える薬剤師」の姿が挙げられた。院に進学する班員は、「新薬開発に関わる姿」を挙げていた。全員患者や社会のために自分ができることを一生懸命やりたいという気持ちが共通していた。

ＩＣ班－１

第一部では「プロを目指して：私たちの進路と夢」と題し world café 形式で討論を行った。報告者の主観も交えつつ討論の内容を以下に記す。

第１ラウンド　「私の大学のここが好き」
・田舎だから勉強がはかどる
・建物や設備が新しい
・先生との距離が近く、勉強を教えてもらえるしお菓子ももらえる
・卒論の時期が早いので国試勉強に集中できる

大学の好きなところを話そうとしてもあまり会話が弾まない。とりあえず嫌いなところを話そうと提案すると次々に出てくる。大学の周囲に何もない、建物が古い、国公立大学は卒論が 11 月なので国試勉強ができない等々。それらに反論する形で各自の大学の良さを捻り出した。話をしていて感じたのは嫌いなところを話しながらも、出身大学を皆嫌いだとは思っていないということ。むしろ好きであるが、言葉で好きなところを表現するのは意外に難しい。

第２ラウンド　「6 年間で成長したことについて自由に話してみよう」
・人と話せるようになった
・周りを見られるようになった
・勉強が好きになった

大学に入るまでは人と話をすることが苦手であったと話していたが才能を開花させたのか本人の口は滑らかであった。周りを見られるようになったという意見があった、本人曰く４年で大学を卒業し社会人となった同級生の影響が大きいという。大学で専門知識を学ぶのは当然であるが、社会に出て活躍するために必要なスキルはそれだけではない。周囲に配慮しつつ必要なことは臆することなく話すというのは、真に自立する上で重要である。

このラウンドでは一度社会に出てから学びなおしている学生が二人おり、学ぶことの面白さに改めて気付いたという意見が出た。学校にも同じように社会人を経ている学生が多くいるとのことで、何かを始めるとき、それに向けて心が定まっていれば年齢は関係ないと考えさせられる話であった。

第３ラウンド　「10 年後の活躍している場面をイメージしよう」
・薬学会の会頭になっている
・企業の開発職につき海外で活躍している
・母親になって家庭を大事にしている
・病院薬剤師として後進の指導を行っている

各自様々な理想があり良い刺激を受けたが、薬学会の会頭になっているという話が出たとき、

会頭になって何がしたいのかという質問があった。目的と手段に分けると、活躍している場面は目的を果たすための手段を行っている場面であり、肝腎の目的がはっきりしていないと意味がない。目的を見失い手段を目的と勘違いしないようにしたい。

ＩＣ班－２

第一部では、「プロを目指して：私達の進路と夢」というテーマについて、4名グループでグループワークの１つであるWorld Cafeを行った。ラウンド（全3ラウンド）ごとにグループのメンバーをシャッフルし、それぞれにテーマが与えられ、自己紹介を含め、テーマに対するおしゃべりや気づき・感想を模造紙に落書きをし、それぞれの意見や経験などの情報交換を行った。以下に各ラウンドについて内容を示す。

第1ラウンド「私の大学のここが好き」

1回目のおしゃべりでは、自身の大学の好きなところを自由に話した。

・校舎などの雰囲気がよく、よくドラマなど撮影で用いられるところが好き。
・上級生、下級生の縦のつながりが強く、情報を得やところがいい。
・みんなが挨拶し、雰囲気が良く、また、勉強しやすい環境であるところが好き。
・最近、医学部ができたこと。また、自然が多いところも好き。

特徴のあるカリキュラムなどよりも、大学パンフレットやホームページでは知ることができない大学内の雰囲気や、学生・教員の仲の良さ、特徴のある教員などに関する意見が多かった。有意義な学生生活を送るうえで重要な情報を交換することができた。また、他学部との交流についての話では、講義としても取り入れた方が良いなどの意見も出た。カリキュラムについての意見交換もあればさらによかったと思ったが、こうした機会に各大学の好きなところ（良いところ）の意見交換ができ、他の大学にも惹かれ、自分の大学にもそうしたことがあれば良いと思うラウンドであった。

第2ラウンド「6年間で成長したことについて自由に話してみよう」

2回目のおしゃべりでは、各自6年間で成長したことを自由に話した。

・自ら勉強するようになり、勉強の仕方が分かってきた。
・3年次のころから、研究・実験づくしで、研究的な考えが身についてきた。
・規則正しい生活ができるようになった。また、今まであまり人と話せなかったが、話せるようになった。実務実習では特に話すように頑張った。
・いろいろな友達と関わったり、話したりする中で、いろいろな考え、価値観を知り、いろいろなことを受け入れられるようになった。また、進んで勉強するようにもなった。

大学という場所で、学ぶ姿勢や研究に取り組む姿勢が身に付いたり、自分自身が人として成長したり、短所を克服できたりなど様々な意見が出た。それぞれが6年間で成長したことは、ど

れをとっても社会人として、そして薬剤師として必要なことであった。これらの経験が将来役に立つと思うとともに、それぞれがこれからも成長していくということが感じられたラウンドであった。

第 3 ラウンド「10 年後の活躍している場面をイメージしよう（未来）」

3 回目のラウンドでは、各自 10 年後に活躍している場面を A4 用紙に絵で示し、絵だけメンバーに見せて、まずはクイズ形式でメンバーに答えてもらい、その後、説明してもらった。

・行政職に就き、薬局、医療機関、自治体、国などの薬事、制度に関わり活躍している。
・病院薬剤師になり、患者さんの近くで活躍している。
・メディカルライター―として活躍している。また、英語を活かし、国境なき医師団の一員として、活躍している。
・病院薬剤師になり、患者さんとのコミュニケーションが築け、信頼されている中で患者を治している。

病院薬剤師や薬局薬剤師などとともに、メジャーではない薬剤師として活躍している方もいて、様々な立場から薬剤師として患者さんや社会に関わることができると感じた。また、そのような職になりたいと思ったきっかけなども話すことができ、自分の能力や体験が将来のなりたい自分像に大きく関わっていることを感じた。さらに、10 年後の薬剤師について今とどう違っているのか、処方権は？フィジカルアセスメントは当たり前？などの話にも広がり、それに対する意見交換を行うなど深い内容となった。それぞれが強い思いや目標を持ち、それぞれの進路、夢に向かっていることを確認でき、また、お互いに良い刺激をもらったラウンドであった。

Ⅱ A班－１

第１部では、「プロを目指して：私達の進路と夢」というテーマで World Café 形式にて３ラウンドの討論を行った。以下に各ラウンドとその討論内容についてまとめた。

第１ラウンド：「私の大学のここが好き」

・大学が海の近くであり、図書館から見える海に沈む夕日が綺麗。
・他学部との交流が豊富である。
・先生が元気である。
・大学の立地が良い。
・大学特典がある。

このラウンドでは、それぞれの大学の好きなところ、魅力について話し合った。大学が自然の中にあることで、景色が良いという意見があがった。また、総合大学であることから、他大学部との交流ができ、人脈が広がったことや大学が綺麗という意見もあがった。地域の施設などが無料で利用することができる特典もあるのも魅力的だと感じた。

第２ラウンド：「6 年間で成長したこと」

・コミュニケーション能力が身についた。
・生活の知恵が身についた。
・考え方等の視野が広がった。

メンバーの半数が一人暮らしをしていたため、6 年間で家事全般が一人でもできるようになったという意見があり、同時に親への感謝の気持ちを忘れてはいけないということをメンバー全員が感じる場面もあった。大学では、いろんな価値観を持った人と出会っていく中で自分自身とは違った考えを知ることができ、視野が広がったという意見もあった。様々な地域から多くの学生が集まる大学の場で出会いはとても大切であると感じた。

第３ラウンド：「10 年後の活躍している場面をイメージしよう」

このラウンドでは、まず絵に描いて他のメンバーにクイズ形式で答えてもらうといった方法で行った。思い描いているイメージを絵で表現するのは難しかったが、話していく中で 10 年後自分自身がどのような薬剤師になりたいのか、具体的な場面で患者さんに対して接客する場面や病院薬剤師として他の医療従事者との関わりを表現しており、絵にすることで頭の中で描いているイメージをより相手に伝えやすかったように感じた。

感想

全てのラウンドで初めてのメンバーで話し合うことで、多くの違った意見、考え方を知ることができた。1 度に多くの他大学の方々と話す機会は今までになく、大学独自の取り組みや魅力についても知ることができ有意義な時間となった。また、10 年後の薬剤師像を各々が明確にイメージしており、とても良い刺激になりました。

ⅡＡ班－２

第一部では「プロを目指して：私達の進路と夢」という題目を掲げ、World Café 形式で「おしゃべり」や模造紙への「落書き」を通して意見交換をした。20 分から 35 分で行われるラウンド毎に異なる４名の学生が向き合い、それぞれ異なるテーマについて３ラウンドのグループ討論に取り組んだ。

各ラウンドについて話し合ったテーマとその概要、総括を以下に記載する。

■第１ラウンド「私の大学のここが好き」

・出身大学の特徴を提示して話し合い、好きなところを探す方法で討論を進めた。

・メンバーの提案で、各メンバーの出身大学とニックネームを模造紙に記載し、後のラウンドでも継続してこのテーブルの参加者の記録を残そうという取り組みがなされた。

■第２ラウンド「６年間で成長したことについて自由に話してみよう」

・「旅行や趣味に積極的に取り組む行動力が身につき、世界が広がった」、「医療系の両親と専門的な会話ができるようになり、自身がついた」、「様々な課題に取り組むことで、マルチタスクをこなす対応力が身についた」といった発表があった。

・ラウンド終盤では今後はさらにどのような成長をしたいか、社会に出てからいかに活躍していくかといった発展的な発言も多く見受けられた。

■第３ラウンド「10 年後の活躍している場面をイメージしよう（未来）」

・第２ラウンドの報告と自己紹介の後、各自 A4 用紙に「10 年後に活躍している場面」を描き、クイズ形式で発表した。

・様々な職種を目指す学生がそれぞれのビジョンを持っていることが分かった。

・発表後は活発な意見交換があり、それぞれの職種について、またそれを目指した理由など、より深く話し合いがなされた。

■総括

今回のワークショップにおいて最初のワークということもあり開始当初は手探り状態だったが、すぐに打ち解けて活発な意見交換をすることができた。主に「自分」に関するテーマを話し合うことで、メンバーがそれぞれどのような環境で学び、どのような価値観を持って行動し、どのような将来を思い描いているのかを知る良い機会となった。

また、同年代の薬学生の様々な発想や考え方を目の当たりにし、非常に刺激的なワークであった。全国の薬学生との出会いを励みにし、私自身もさらに努力し、活躍していきたいと感じた。

ⅡＢ班－１

第１部では「World Cafe」という手法を用いて、『プロを目指して：私達の進路と夢』について討議した。テーブルマスターを含めた３～４名でラウンドごとにテーマ、メンバーを入れ替えて討論を行った。討論を行いながら、思ったことやキーワードを自由にＡ４用紙に書き出し、自己紹介、前ラウンドで印象に残った話(第２ラウンド以降)を交えながら、各テーマについて各々の意見を言い合った。

＊第１ラウンド：私の大学のここが好き

・学校を挟んで路面電車が通っているため、大学生以外の人も学校の中を歩いており、大学が地域に密着している。

・一学年の学生数が多いため、様々な人と触れ合い、刺激を受けることができる。

・英語でプレゼンを行う授業があるため、自然と英語の力が伸びる。

・自然豊かであるため、学校の坂道で山菜が取ることができる。しかし、クマとの遭遇の可能性もあるため、危険である。

・さぬきうどんを学食で食べることができる。

このラウンドでは、大学の授業内容の違いや他学部との交流の違いなど学生生活のことを討論したり、キャンパスの広さや交通手段など各大学の立地について討論したりした。同じ薬学部であっても、各大学により特色があり、初めて話す人どうしの world café であったが、あっという間に時間が過ぎていった。また、他学生の大学の話を聞くことにより、自分の大学の新しい面も発見することができた。

＊第２ラウンド：６年間で成長したことについて自由に話してみよう

・薬剤師≠調剤であることを知り、衛生など薬学部の分野の広さを学んだ。

・試験の数が多いため、効率よく勉強する力や情報を収集する力を身につけた。

・薬理学の知識が増えた。

・飲食屋でアルバイトをしたことにより、コミュニケーション能力が向上した。

・塾でのアルバイトにより子供と接する難しさと子供も一人前として接するということを知った。

・一人で行動できるようになった。

前半は、学校の授業及び試験により学んだことを話し合った。後半は、学外での活動により得たことについて話し合った。これらのことから、薬学の教養や勉強に対する能力などは学校で身につけることができるが、コミュニケーション能力など対人関係の向上は学外での活動である部活動やアルバイトによって得られており、学外で活動することの大切さを改めて感じることができた。

＊第３ラウンド：10 年後の活躍している場面をイメージしよう

・研究者になって、海外にはばたいている。

・患者さんに頼られる薬剤師になっている。

・患者さんの話をきちんと聞くことができる薬剤師になっている。
・海外でバリバリ働いている。

研究者や病院薬剤師など自分が就きたい職業において 10 年後の働いている姿を想像して、それぞれ思い思いに紙いっぱいに描いた。研究者として海外に進出し、患者さんのために新しい治療薬の開発に携わりたいという学生もいれば、病院薬剤師として患者さんの側にいて心の支えになりたいという学生もおり、さまざまな夢を聞くことができた。しかし、みんな類似していたのは、患者さんのために、という気持ちであった。この思いはどんな職種に就こうと思っている人でも根底に持っている思いであり、薬剤師の使命の一つでもあるのだと再確認をすることができた。

ⅡＢ班－２

第 1 部では、「プロを目指して：私達の進路と夢」と題して、World Café 形式を用いて、3 ラウンドのグループ討論を行った。各ラウンドでの討論の結果を以下にまとめる。

第 1 ラウンド：「私の大学のここが好き」

この議題では、それぞれが思う大学の好きなところを自由に発言しあった。「自然が多く、田舎だがそこが良い」、「学食のから揚げがとても美味しい」、「勉強がしやすい環境がある」などの話題がでた。その中でも一番多かったキーワードは、「研究室」だった。共に勉学に励む仲間の話や、後輩を含む研究室のメンバー全員でイベントを行ったこと、ご指導いただいている教授の先生方が好きという話題で盛り上がった。環境こそは違うものの、それぞれが仲間の大切さについて共感できた良いラウンドだった。

第 2 ラウンド：「6 年間で成長したことについて自由に話してみよう」

この 6 年間で成長したことと題して、班の全員が共感できたものは、「薬剤師になりたい気持ちが強くなった」、「勉強が好きになった」ということ。さらに、たくさんの人と出会い、関わったことで「コミュニケーション能力が向上した」、「人との距離感・気持ちが分かるようになった」というものだった。これらはすべて薬剤師にとって必要不可欠な能力であり、しっかりと鍛えることができていた。夢はそれぞれ異なるが、薬剤師という目標は同じで、自分達が成長したことを言葉にすることで良い刺激になり、さらなる成長へとつなげられたのではないかと感じた。

第 3 ラウンド：「10 年後の活躍している場面をイメージしよう（未来）」

このラウンドでは、10 年後に自分が活躍している場面を想像して絵を描き、クイズ形式で発表を行った。自分の思い描いていることを絵で表現することは難しかったが、「お薬手帳の活躍に携わっている」、「医師や患者など誰からでも頼られる薬剤師になっている」、「どこで働くことになっても、チームで協力してやっていきたい」、「幸せな家庭を築きながら、薬剤師としての仕事をしっかり行っている」など、それぞれの未来像をしっかりと描けていた。言葉だけでなく、絵にすることでイメージをしやすくなり、説明がしやすかったように思えた。さらに、自分の思い描く場面を語るだけでなく、メンバーの話も聞くことで、薬剤師が活躍できる可能性の幅が広がったように感じた。

ⅡＣ班－１

第一部では、「プロを目指して：私達の進路と夢」というテーマを World Café 形式で小グループ討論を行い、自己紹介を含め意見交換をすることで交流を深めた。各ラウンドに小テーマが与えられ、3～4 名のグループで、テーマごとにメンバーを入れ替えて「ラウンド」を行い、討論の内容(気づきや感想)を模造紙に記載し、自身の意見や経験など情報交換を行った。以下に各ラウンドでの討論内容について記載する。

＜第１ラウンド　「私の大学のここが好き」＞

第１ ラウンドでは、自分の大学について良い点、悪い点について意見を出し合った。

・大学内の建物が新しいなど全体的に綺麗
・設備が整っている（NMR があるなど）
・立地がいい
・学部や学科が多いため、様々な分野のことを知ることができ、交流が持てる
・学食がおいしく、コストパファーマンスも良い

ワークショップが始まって初めてのセッションのため、皆が緊張していた。しかしテーマが大学についてだったため、自己紹介も兼ねて大学について一言言うようにして討論を開始すると様々な意見が飛び交うようになった。ある時は共感し、疑問があったらすぐに質問するなど活発に討論できた。また良い点だけでなく、悪い点なども述べて皆が積極的に討論に参加していた。初対面であったが、それぞれがその場の空気を読んで話し手や聞き手になり、すぐに打ち解けられるということを学んだ。

＜第２ラウンド　「6 年間で成長したことについて自由に話してみよう」＞

第２ ラウンドでは、大学に入ってから今まで一番成長したことについて発表した。

・何事にも「とりあえずやってみよう」という精神を持ってチャレンジした結果、実行力や積極性が身に付いた
・引っ込み思案で一人では何も出来なかったが、今では自分の行動範囲が広がり、1 人旅行が行けるまでに成長した
・薬学の専門知識が身についた
・コミュニケーション力が身に付いた
・研究をしていくうちに教授のすごさに気付けた

一人一人が様々な体験や成長したことについて発表した。各大学から人が集まったからこそ持っている知識や考え方などが様々であり、どの話も興味深いものばかりであった。どのメンバーも人としてはもちろん薬学生としても成長しており、また今回の討論を通して、自分にはなかった知識や考え方、今後の自分の成長につながる行動について考えるきっかけを得たメンバーが多かったのではと考えている。

＜第 3 ラウンド　「10 年後の活躍している場面をイメージしよう(未来)」＞

第 3 ラウンドでは、10 年後の活躍している場面を絵で表現し発表した。

・医師に対して積極的に処方提案をするなど、誰からも信頼される病院薬剤師
・薬剤師としての仕事だけでなく、マネジメントもでき、起業している薬局薬剤師
・仕事とプライベートや家庭を両立している製薬企業の臨床開発職
・セルフメディケーションを推進し、将来は教育にも携わっている薬剤師

10 年後に活躍している場面を A4 用紙に絵で示してクイズ形式でメンバーに答えてもらい、それぞれが実際はどのような場面をイメージしたかを説明するという流れで討論を行った。ただ薬剤師として働くのではなく、具体的に携わりたい分野を見据えているメンバーが多く、今後のビジョンがしっかりしていた。またその分野に携わりたい理由や経緯を説明する中で強い思いや考え方が読み取れ、新たな視点から将来の働き方について考えるきっかけとなり、さらなる討論を通してお互いの理解が深まった。

〈プロを目指して：私達の進路と夢（World Café）全体を通して〉

World Café を通して他大学の学生と意見交換を行うことで、様々な意見や考え方があることを学び、自分とは異なる価値観に触れることで視野が広がり、新しい考え方を持つなどの様々な刺激をもらった。このような全国から各大学の学生が一堂に会する機会は滅多にないからこそ今回のワークショップではお互いによい刺激を与えあい、短い間だったが少し成長できたのではないかと考えている。

ⅡＣ班－２

第一部では、「プロを目指して:私達の進路と夢」というテーマで World　Café 形式にて 3 ラウンドの討論(おしゃべり)を行った。ラウンドごとに 3~4 名ずつの異なるメンバーがテーブルに集まった。以下に各ラウンドの討論内容についてまとめる。

第 1 ラウンド

テーマ「私の大学のここが好き」

・有名大学なのでブランドがある
・教授が有名人
・立地がいい
・他の医療系学科との交流が持てる
・教授が薬局でパートをしていて最新の医療現場の話が聴ける

大学の好きなところを主張することは恥ずかしさもあり、最初はなかなか話が弾まなかった。しかし、討論を進めるうちメンバー間での緊張がほぐれ、それぞれの話に対し共感したり、関連した話をしたりと活発に討論できた。初対面でも、自分の話をしようとする姿勢・相手の話

を聴く姿勢をそれぞれがもっていることで、すぐに打ち解けられるということを学んだ。

第 2 ラウンド
テーマ「6 年間で成長したことについて自由に話してみよう」
・人間関係でうまくいかないことがあったが、出会いを増やすことや自分の行動範囲を広げることで悩みが解決された
・薬学の専門知識が身についた
・フィジコやプログラミング人形を用いて病態を設定し、さらに薬剤投与のシミュレーションをすることで病態・薬物治療について深く理解できた
・問題解決能力が身についた
・英語の論文が読めるようになった

メンバー毎に成長したことは様々であり、どの話も興味深いものばかりであった。各大学だからこそ得られた知識や個人として得た考え方など、どのメンバーも薬学生として、そして人として成長していた。討論を通して、自分にはなかった知識や考え方を得たために、今後の自分の成長につながる行動について考えたメンバーも多かったのではないかと思う。

第 3 ラウンド
テーマ「10 年後の活躍している場面をイメージしよう(未来)」
・丁寧で充実した薬歴が書ける、患者さんや医療従事者の方々から信頼される病院薬剤師
・臨床現場で働いている、もしくは研究職で働いている薬局薬剤師
・地域の小・中学校に薬についての授業をする、研究にも携わる薬剤師
・10 年後興味のある分野（DMAT など）に携わる病院薬剤師

10 年後に活躍している場面を A4 用紙に絵で示してクイズ形式でメンバーに答えてもらい、実際はどのような場面をイメージしたかを説明するという流れで討論を行った。研究や DMAT、地域医療など、ただ薬剤師として働くのではなく具体的に携わりたい分野を見据えているメンバーが多かった。それぞれがなぜその分野に携わりたいのかという説明をする中でその思いや考え方が分かり、さらなる討論を通してお互いの理解が深まった。

総括
World Café を通して他大学の学生と意見交換を行う中で、様々な意見・考え方があることを学んだ。初対面の人ばかりいる中では、急に議論に入るよりも World Café で話をしやすい雰囲気づくりをすることが有効だと感じた。自分にない考え方や思いに触れるという経験は、全国から集まった学生が一堂に会したからこそ得られたのだと思う。お互いによい刺激を与えあい、それぞれの視野を広げることができた。

ⅢＡ班－１

第一部では「プロを目指して：私たちの進路と夢」というテーマで World Café 形式で討論を行った。3 つのラウンドにそれぞれの小テーマが与えられ、そのテーマに関する自分の考えや意見を交換し、気付き・感想を模造紙に自由に記入した。以下に各ラウンドの討論内容についてまとめる。

第１ラウンド「私の大学のここが好き」

自己紹介とともに、自分たちの大学の好きなところを話し合った。好きなところについて、以下のことが挙げられた。

- キャンパスが広い
- 附属中学、附属高校がある
- 学部が多い
- 駅が近い
- 設備が良い
- 学食が美味しい
- 大学の周りに自然が多い
- 講義と講義の間の休み時間が長い

敷地、設備、立地など通いやすさや、学校生活の快適さを述べたメンバーが多く見られた。話し合いの中では、大学そのものの良さだけでなく、それぞれの大学がある地域の良さについても意見が交わされた。

挙げられた特徴の中にはメンバー全員から共感を得られたものもあったが、違った意見を得られたものの方が多かった（狭いキャンパスの方が、学生の交流が盛んである、など）。

第２ラウンド「6 年間で成長したことについて自由に話してみよう」

6 年間で成長したことを発表し、話し合った。成長したことについて、以下のことが挙げられた。

- アルバイトを複数経験した
- 部活動に打ち込んだ
- 嫌いな科目を克服した
- 好きな科目を頑張った
- 早起きを継続できた
- 料理が得意になった

勉強のことだけでなく、生活面でも成長できた部分について話し合った。勉強面では、好きな科目、嫌いな科目、取り組んでいる研究分野をそれぞれ挙げ、どのように成長していったかを具体的に意見を出し合うことができた。

生活面では、アルバイトや部活動で実績を残せたことなどが挙げられた。日々の学生生活の中で、勉強面以外でも新しいことに挑戦し多くを学んできたことが成長に繋がった、という意見が多く見られた。

第３ラウンド「10 年後の活躍している場面をイメージしよう（未来）」

10 年後に活躍している場面を A4 用紙に絵で表現し、他のメンバーにどんな場面かをクイズ形式で答えてもらった。それぞれ描かれた場面を以下にまとめる。

- 10 年後の自分は病院薬剤師となっている。薬が処方されているが、別の薬のほうが患者にとって最適であると判断し、処方の変更を提案している。
- 10 年後の自分は製薬企業の営業に携わっている。新薬の情報を医療機関のスタッフに細かく説明し、より良い新薬を広く安全に使ってもらうよう努めている。
- 10 年後の自分は薬局薬剤師となっている。地域のお年寄りが薬をもらいにきていて、適切に薬を飲めるように丁寧に服薬指導を行い、頼られる薬局薬剤師になっている。
- 10 年後の自分は研究者となっている。新薬の開発につながる研究を続け、既存の薬よりも良い薬をつくる役割を担っている。

薬剤師、製薬企業、研究者といった、さまざまな場面での活躍をイメージした絵について話し合った。臨床の現場で働く薬剤師や、営業として医療機関と関わる仕事をイメージしたものでは、人とのコミュニケーションを重視した絵となっていたが、研究活動をイメージした絵では個人の活躍が重視した絵となっていた。

しかし議論の中では、どの場面においても、自分の能力がどのように人の役に立つか、またどのように人に伝えるかが大切である、という意見が多く見られた。

ⅢＡ班－２

World Café「プロを目指して私達の進路と夢」

「プロを目指して:私達の進路と夢」をテーマに掲げ、World Café 形式でグループ討論を行った。３つのラウンドにそれぞれの小テーマが与えられ、そのテーマに対する自分の考えや意見を交換した。以下に各ラウンドの議論の内容をまとめる。

第１ラウンドメニュー　テーマ：「私の大学のここが好き」

・行動力ある学生多い

薬学部は文系やその他の理系と比較して他学部や他大学の学生との交流が少ないが、自分の大学の学生は行動力があり、交流が多く視野が広い。

・大学の歴史が長い

私立の中でも歴史が長いことが自慢。

第２ラウンドメニュー　テーマ：「６年間で成長したことについて自由に話してみよう」

・実習に行くまでは学習内容の目的が見えず漠然と勉強していたが、臨床の現場を体験して能動的に学習するようになった。

また、実習を通して協調性やコミュニケーションといった人間的にも成長できた。

もっと早く臨床の現場を体験したかった。

・部活動で主将をすることで人をまとめる力（リーダーシップ）が身についた。

精神的に強くなり、コミュニケーション能力も向上した。
・アルバイトで全国を飛び回り、大勢の人を相手に講演会をさせてもらうことで人前での発言を恐れないようになった
・研究を通して答えがない物事に対して追及する重要性を理解できた

第３ラウンドメニュー　テーマ：「１０年後の活躍している場面をイメージしよう（未来）」
第３ラウンドでは「１０年後に活躍している場面」を A4 用紙に絵で示し、その絵だけをメンバーに見せてクイズ形式で答えてもらう。
・病院薬剤師として働く中で後進の育成に励みたい
・行政で働き、医療との懸け橋になりたい
・理想の薬局をつくりたい

＜総括＞
各大学に様々な特徴があり、その中で大学生活を筆頭に経験してきたことに違いがあり、成長したことについても各自が成長を感じる場はそれぞれ異なるものであった。進路については各自で確固たる将来像があり、全体を通して各自の考えをメンバーで共有し、意見交換することで新しく刺激を受けるとともに今後の進路と夢を改めて明確にすることができた。

ⅢＢ班－１

「プロを目指して：私達の進路と夢」というテーマで World Café 形式により議論された。今回は「私の大学のここが好き」「6 年間で成長したことについて自由に話してみよう」「10 年後の活躍している場面をイメージしよう(未来)」の 3 つのラウンドを行った。

〈第 1 ラウンド〉「私の大学のここが好き」
・薬草園が充実
　→見学ツアーが組まれるくらい薬草園が立派。地域コミュニティの場にもなる。
・複数の科がある
　→医看薬理で合同講義が組まれていて、自然とチーム医療を意識することができる。
・ 学部生の人数
　→多ければ人の繋がりが増え、少ないとより密接な人間関係が築ける。
・ 学生への優遇
　→学生こその特権。遊園地やイベント会場に無料で入れることもあり。

第 1 ラウンドでは、初め皆意見を言うことに戸惑うも、一度意見が出ると好きなところ、逆に嫌いなところ、両方の意見が出た。様々な意見が言えることから、6 年間の時の重みと充実した学校生活をそれぞれが送っていることが窺えた。

〈第 2 ラウンド〉「6 年間で成長したことについて自由に話してみよう」
・薬学についての知識がついた
　→6 年間勉強してきて、思考回路が完全に薬学的なものになった。
・お酒が飲めるようになり、その席で目上の人への気遣いを覚えた。
　→薬剤師として欠かせないコミュニケーション能力を養ううえで、大切な機会。
・ 卒業研究を経て、専門性が高まった
　→6 年間で自分が興味のある分野を追及することができた。

第 2 ラウンドでは、6 年間という時間の中で、単に薬学生として知識や技術的に成長したというだけではなく、人として成長できたのではないかという意見がでた。研究室やサークル活動を通して、様々な人とコミュニケーションを図ることで、初めて会う相手でも上手に会話ができる力がついた。

〈第 3 ラウンド〉「10 年後の活躍している場面をイメージしよう(未来)」
・薬局で一次予防を重点的にしていきたい。
　→食事、運動などの一次予防も積極的に行っていきたい。
・新たな在宅医療の形を築きたい。
　→現在よりも需要が増えていく在宅医療をもっと充実させたい。
・ 漢方専門薬局で活躍したい。

→親身に患者さんと向き合い、患者さんに合った漢方を提供したい。
・公務員になって様々な場で仕事をしたい。
→薬局の設備の確認など行政における仕事をし、現場と行政を繋ぎたい。

第3ラウンドでは、10年後の未来を思い描て、それぞれを絵を描き、自分の目標を披露しあった。薬局、病院、行政、それぞれ活躍の場は違えど、患者さんや国民のために、高い目標をもっていた。

〈総括〉
お互いに初めて会う人同士、最初は意見を言いづらい部分もあったと思う。しかし、すぐに同じ大学の友達同士のように意見を言い合い、意思の疎通が図れた。薬学生のコミュニケーション能力の高さと自分の意見を発信していく力が発揮されていたと思う。また、それぞれが今の自分を把握し、これからの自分がしっかりイメージできていた。一人一人が自分の目標に向かって研鑽することで、薬学の未来に明るい光を灯すことになるのは間違いない。

ⅢＢ班－２

第一部では、「プロを目指して：私達の進路と夢」というテーマでWorld Café形式で、各グループ3～4人ずつテーブルに集まり、3ラウンドに分けて討議を行った。以下に、各ラウンドでの討議内容を紹介する。

第１ラウンド：「私の大学のここが好き」
第１ラウンドでは、自己紹介を兼ねて自分の大学の好きなところを語った。「自然のある大学」や、「学生の意見が通る大学」、また敷地面積の広さや環境・設備など、自分の通う大学との共通点や相違点を見つけていくうちに、各県の特徴を捉えることができた。
さらに、それを踏まえた上で、自分の得意なことや趣味にまで話題が派生した。各々自分の大学に誇りを持っていることが感じられた。

第２ラウンド：「６年間で成長したことについて自由に話してみよう」
第２ラウンドでは、卒論研究を通して身に付いた忍耐力、コミュニケーション能力の上昇、度胸などの意見が挙がった。また、実家から離れて暮らしていると、自分の出身県を客観的な目で見ることもできるため、自分の知らない日本を知ることができた、という意見もあった。これらの中で最も印象深いものが卒論研究を通して身に付いた忍耐力であり、実験で苦労したことや研究室での日常にグループ全員が賛同することができた。卒論研究は私たちを成長させてくれるものだという意見でまとまった。

第３ラウンド：「10年後の活躍している場面をイメージしよう（未来）」
最後のラウンドでは、各々が10年後に活躍している自分をイメージしてイラストで表現した。

文章にすると、「企業で活躍する人材」、「妊婦・授乳婦専門薬剤師」、「新薬の研究開発」、「患者さんに寄り添う病棟薬剤師」をそれぞれ目指していることが分かった。目指すものは異なるが、患者さんの役に立ちたいという気持ちは共通していた。これらは、大学での卒論研究や実務実習を通して自分の目で見て、体験することで上記の進路に至っている。自分のなりたい薬剤師像を思い思いに述べ、互いの夢を応援した。

感想

テーブルマスターとして初めて出会ったメンバーと上手く会話ができるか不安だったが、活発に意見交換を行うことができた。また、他大学の学生と討論することで新たな価値観や薬学生としての考え方を学ぶことができ、視野を広げることができた。全国の薬学生と交流することで、自分に足りないものは何なのかを見直す良いきっかけとなった。

ⅢＣ班－１

第一部では、World Café 方式で議論を行った。議論の大きなテーマは「プロを目指して：私達の進路と夢」であった。
Café ということでコーヒーやジュースをいただきつつ、旅人役となったメンバーは各テーブルを 20~30 分ほどで移動しながら議論を重ねた。以下に議論の詳細・経緯を記載する。

第 1 ラウンド：私の大学のここが好き
第 2 ラウンド：６年間で成長したことについて自由に話してみよう
第 3 ラウンド：１０年後の活躍している場面をイメージしよう（未来）

第 1 ラウンド

このラウンドでは私を含め３名で議論を行った。議論を重ねる中で大きく注目した話題は「国立大学と私立大学におけるカリキュラムの違い」であった。ある国立大学では、大学四年次の CBT・OSCE、国家試験対策などは学生の自主性に任されている点が話題に上がった。一方で、私立大学においては、CBT・OSCE、国家試験対策を早期からしっかりカリキュラムに組み込まれており、大学側の手厚い指導がある点が挙げられた。国立大学、私立大学の学生共に、自身の大学カリキュラムには満足していた。カリキュラムに大きな違いがあるにもかかわらず、双方の学生の満足度は高かった。
さらに「単科大学と総合大学の違い」についても話題に上がった。総合大学であるメリットを生かして、歯学部の人体解剖実習を見学させてもらえる点や、大学 1,2 年次に、薬学とは関係のない分野の学問（古代ギリシャ語など）に触れる機会が多く設けられた点が挙げられた。一方、単科大学であるメリットとして、学生の数が少ないからこそきめ細やかな指導をしてもらえる点や、大学事務職員、教授陣との距離が近く、気軽に様々なことが相談でき、実際に就職に関してや勉強方法に関してなど相談できたことで問題解決に至った例があがった。
また、大学という機関に在籍しているからこそ使用できる高価な実験機器（NMR など）を用いた研究を実施できるという話題も、大きく盛り上がりを見せた。特に、国立大学では、研究費の面で研究遂行が困難になることは少ない、という利点があがった。
通常より１名少ない状態であったにも関わらず、初回ラウンドから活発な意見交換が交わされていた。

第 2 ラウンド

このラウンドでは４名で議論を行った。４名の議論に大きく共通していた点は「コミュニケーション能力の向上」と「医療従事者としての倫理観の育成」という２点であった。
インターネットばかりやっていた高校生時代を脱するべく、自ら他者へ積極的に話しかけ、大学で多くの友人をつくることが出来た人や、６年間オープンキャンパスの運営に主体的に関わったことで臨機応変な対応力を身につけられた人などがいた。４名それぞれが、病院・薬局実務実習を通して、臨機応変なコミュニケーション能力の必要性を実感しており、大学時代に培ったコミュニケーション能力を、今後さらに各々の仕事に活かしていきたい希望があった。

また「医療従事者としての倫理観の育成」についても話題があがった。病院実習を通して、実際に目の前で行われている医療の現実を目の当たりにし、テレビドラマであるような安らかな死を迎える人ばかりではないことを痛感した、という意見が多々上がった。薬学部に進学していなかったら考えなかったような死に関する倫理観や、医療従事者として人の死をどのように受け止めるべきかを熟考する機会があったことに感謝する声も多かった。熟考した答えはまだ出ないが、医療従事者として人の死と向き合う心構えをもつことができたのが大きく成長した点である、といった声が４名からそれぞれ挙げられた。

第 3 ラウンド

このラウンドでは「10 年後の活躍している場面をイメージした絵」を５分間で描き、それを説明がない状態で他のメンバーに絵の内容を考えてもらう、といった非常に楽しい取り組みを行った。

議論に参加した４名のうち、３名が病院または薬局の臨床現場で、１名が企業で働く姿を考え、それぞれイラストを描いた。興味深かった点として、４名それぞれの進路等は一切言及せずにイラストを描き、内容を各々で考察したため「２人の人が机を挟んで向かい合っている絵」を見た時に、臨床現場で働くことを想定した人と、企業で働くことを想定した人で捉え方が大きく違った点がある。薬剤師が活躍するフィールドとして、病院・薬局などの臨床現場だけではなく、企業・行政などもあることを改めて実感した。

臨床現場で働くことを考えた人は、患者との良好な対人関係を築けている未来を想像した人や、在宅医療に積極的に関わっている未来を想像した人がいた。企業で働くことを考えた人は、医薬品に関する情報を臨床現場へ円滑に広めるために自らできることを考えていた。

また、10 年後を考えて議論していく中で「奨学金の返済」という話題もあがった。４名中３名が大学の学費のほとんどを何らかの形で借りている状態であり、これらを返済するためにも、薬剤師として 10 年後活躍していたいという切なる希望もあった。

考察

どのラウンドでも活発な意見交換や議論が交わされており、初対面とは思えないような和気藹々とした雰囲気だった。最後のラウンドが終了するときには、一部、模造紙の白い部分が見えなくなるくらい文字が書き込まれたのが、議論の活発さを物語っていると思う。

各ラウンドで他のテーブルの話を最初に聞くことで、様々な意見を垣間見ることができ、議論の幅がさらに広がった。このワールドカフェで、様々な意見を持った人の話を聞くことができ、一緒のチームになったメンバーへの興味がわき、今後の議論でも「もっと色んな人の話や意見が聞きたい」と思えたことがとてもよかった。

また、何度かⅢ班全体での発表や質疑応答、討論が設けられたが、ワールドカフェ形式で話し合ったことでお互いが顔見知りになり、話したことがある状態だったので、気兼ねなく意見が言える雰囲気が出来上がっていたのも良かった。

ⅢＣ班－２

第一部では、「プロを目指して：私達の進路と夢」という議題で World Café 形式で討議を行った。3～4 名のグループに分かれ”おしゃべり（ラウンド）”を行い、気づきや感想を模造紙に”落書き”した。また、テーマごとにメンバーを入れ替えて 3 回のラウンドを行った。第 3 ラウンドはテーマに関する絵を書いてそれぞれ何を表しているかを発表した。各ラウンドの内容を以下にまとめる。

第１ラウンド：「私の大学のここが好き」

➢ **自然が豊か**

大学周辺の自然が豊かで野うさぎやタヌキがいるのだという。田舎で自然が豊か、周辺に森があるという意見は他の学生からも出たが、野うさぎに出遭った人はおらず、全員驚いていた。周りに公共交通機関が少ないため、学生は毎日車で実習先に通っていたという。

➢ **学部間の交流がある**

総合大学において部活などで他学部との交流がある大学が多く見られた。大学側が学部合同でキャンプ、グループディスカッションなどをする場を与えてくれるところもあった。しかし一方で、単科大学やキャンパスに薬学部しかない大学では他学部との交流が難しく、もっとたくさんの人と交流を持ちたい、話を聞きたいという意見もあった。

➢ **患者さんに話を聞ける機会がある**

ある大学では薬害に遭われた患者さんにその実態について話を聞ける行事がある。実際に被害に遭った本人から話を聞くことにより、薬害がより身近で大きい問題であること、私たちは加害者になりうることを認識することができたという意見があった。患者さんの苦しみや生き方をより実感できるような行事が各大学で行われてもいいのではないだろうか。

➢ **卒業論文発表が早く終わるため国家試験の勉強に集中できる**

この部分は国公立と私立で大きく差が出た。国公立の学生は自分たちの大学でももっと手厚く国家試験対策をしてほしいという意見が挙がった。

➢ **人数が少ないため学部内が仲良し**

人数についても国公立と私立で大きな差がある。人数が少ないと全員と顔見知りになれるうえ話す機会も多いため、深い交流を持つことができる。一方で人数が少ないとトラブルがあったときに困るという意見もあった。

まとめ

同じ名前のつく学部でありながら、大学の立地や総合大学・単科大学、国公立・私立で大きな違いがある。大学ごとの良さは残しつつ、他大学のいいところは進んで取り入れていく姿勢があれば各大学が切磋琢磨しよりよい教育ができると感じた。

第２ラウンド：「6 年間で成長したことについて自由に話してみよう」

➢ **コミュニケーション能力がついた**

大学に入って高校までより交流する人の数が多くなり、コミュニケーション能力の向上を実感している学生は多かった。また、マイペースな性格だったが多くの人と交流することで周りを

みるようになったという意見も出た。

➢ **情報を取捨選択できるようになった**

大学の授業は分かりやすい授業も多いが、教授の自慢話や趣味の話でほとんどを終えてしまうものも一部ある。その授業において重要な部分を抽出する能力が挙がったという意見があった。それに関連して、教授もご多忙であると思うが、出来れば必要な情報を分かりやすく教えていただきたいという希望は全員が持っていた。また、長時間座って話を聞く忍耐力と集中力がついたという意見も挙がった。

➢ **自分から勉強するようになった**

大学に入学するまではほとんど勉強してこなかったが、大学ではそうもいかず自力で勉強するようになったという。大学に入学するまでの勉強量には個人差があると思うが、薬学部に入学したからにはしっかり勉強しなければならないというのは共通の認識であった。

➢ **大学の歴史に詳しくなった**

歴史ある大学であるため、大学の歴史に関する授業があるそうだ。新設薬学部が多い中、古くからある薬学部の歴史を学べることは貴重な経験であるという意見があがった。

➢ **他力本願ではなく自己責任で行動できるようになった**

特にグループワークにおいて、人任せでは何も進まないと実感し、自ら動けるようになったという意見が出た。自分が何をすべきか考え、自己責任で行動することが重要であるという意見には全員が賛同した。

まとめ

自分が何を考え、どのように行動するかで成長は異なることを改めて認識できるディスカッションであった。与えられた環境で、受け身ではなく自分から成長していこうとする姿勢を持ちたい。

第 3 ラウンド：「10 年後の活躍している場面をイメージしよう（未来）」

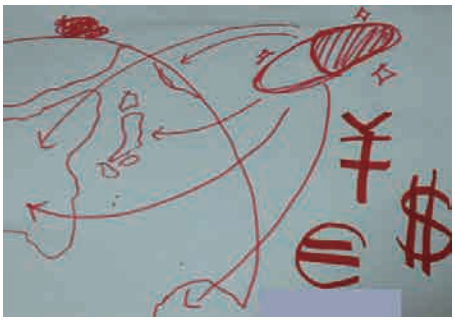
➢ **教育者になり、患者や後輩の教育に携わりたい**

指導薬剤師になり、後輩の育成に携わっている図である。自らが学び成長するだけでなく、それを後輩に伝えていくことで薬学全体のレベルアップにつながると感じた。

➢ **処方箋がなくても気軽に声をかけてもらえる薬剤師になりたい**

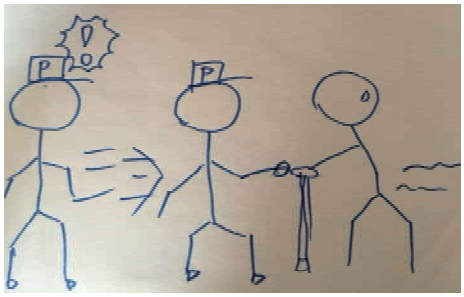
患者さんが処方箋を持たずに薬局を訪れ、気軽に話している図である。
しかし、ほとんどの人が薬局は処方箋を持っていき、薬を受け取るところだと思っていることが現状であり、より職能をアピールしていかなければならないという意見があった。

➢ 新薬を世界中に届けたい



MR としてしっかり利益を上げて、それを新薬開発に使ってもらい、その新薬が世界中に届いている図である。そしてその分対価を得たいという。議論の中で、お金は悪ではなく、お互いが幸せになるためのツールであるという意見も挙がった。

➢ 当たり前のことが当たり前にできる人になりたい



困っている高齢者にすぐに気づき、助けている図である。帽子の P は police ではなく pharmacist である。グループ全員が、まずは当たり前のことを当たり前にすることが最も重要だという認識であった。一方、席を譲ったが断られたなどの経験をしている人も多くおり、好意を素直に受け取ることも重要であるという結論に至った。

まとめ

一人ひとり目指すところは異なるが、全員に”人の役に立ちたい”という共通の思いがあった。仕事内容は異なっても根底は同じであること、心の中で思っているだけではなく実際に発信して行動に移す重要さを感じることができた。

総括

最初の討議ということもあり初めは緊張感があったが、カフェのような和やかな雰囲気で自由に発言することで緊張がほぐれ、討議を円滑に進めることができた。討議というと意見のぶつけ合いというイメージが強いが、World Café ではコミュニケーションを取るうえで重要な相手の話をよく聞き、受け止めるという行為が自然とできていたように感じた。

最後に、本 WS の開催にあたり、ご指導、ご尽力いただきました日本薬学会の関係者の方々、大学の先生方、タスクフォースの先生方、卒業生の皆様に心より感謝申し上げます。

第二部

「求められるニーズは何か？」

セッションⅠ

「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」

第２部
「求められるニーズは何か？」

10年後、
20年後

「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」

第１部、ワールドカフェやってみて
どうでしたか？

第２部では・・・・・

１）社会が私たちに求めているものは何か？

２）「将来の社会のニーズ」を考えてみましょう。

10年後、20年後に求められる社会のニーズ、自分の求めるニーズや薬剤師という国家資格を持つ全員に求められるニーズについても考えてみてください。

第１部、ワールドカフェやってみて
どうでしたか？

第２部では・・・・・

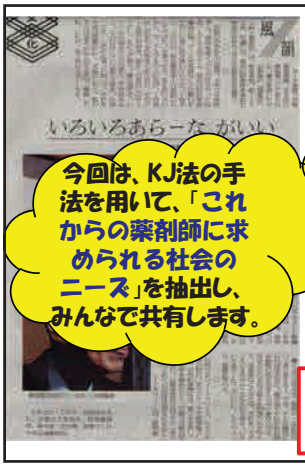
１）「将来の社会のニーズ」を考えてみましょう。

２）先ほど、活躍の場面を考えた時はどんなニーズを考えてました？

10年後、20年後に求められる社会の
自分の求めるニーズや国家資格を持つ
ALL薬剤師に求められるニーズについて
考えてみてください。

ＫＪ法

「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」



今回は、KJ法の手法を用いて、「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」を抽出し、みんなで共有します。

様々な問題点

ＫＪ法

情報を徹底して収集

↓

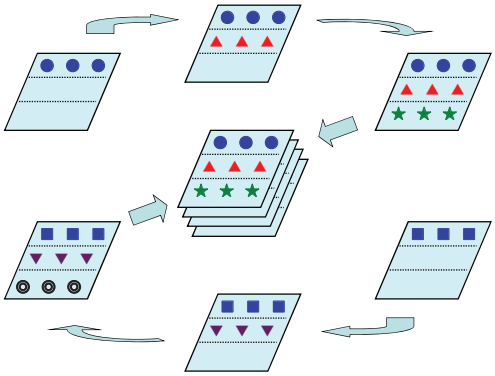
語るところを聞く

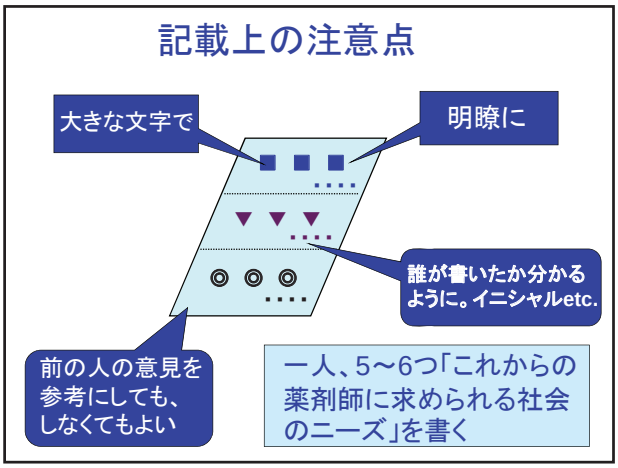
↓

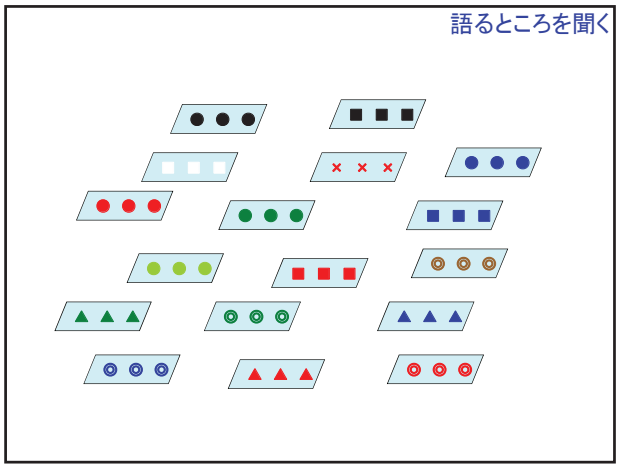
情報の整理

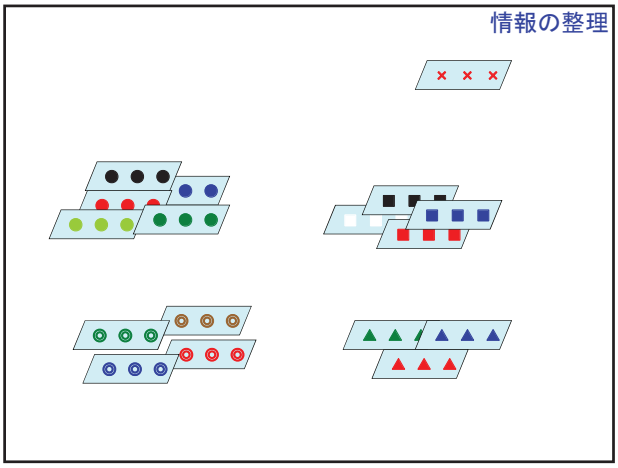
情報の整理と共有

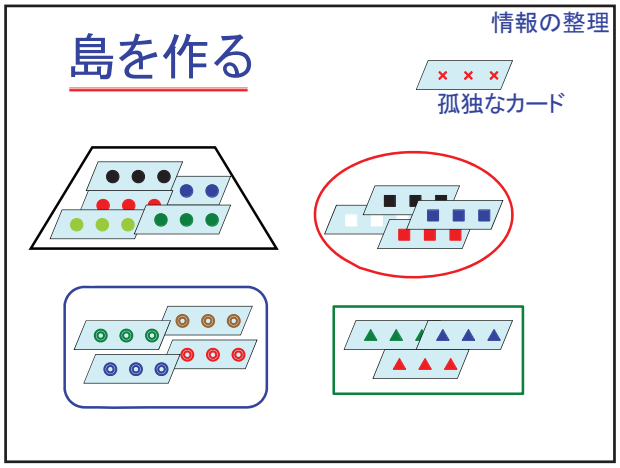
ニーズの抽出

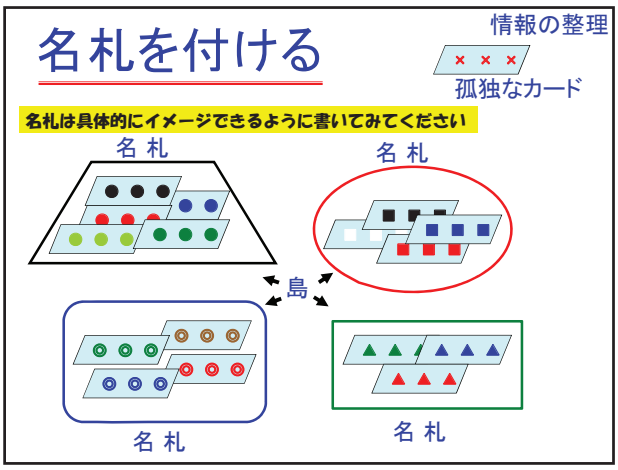


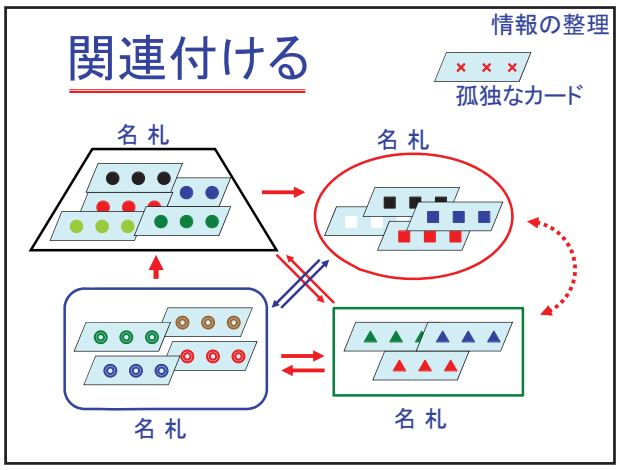

記載上の注意点
大きな文字で
明瞭に
誰が書いたか分かるように。イニシャルetc.
前の人の意見を参考にしても、しなくてもよい
一人、5～6つ「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」を書く


語るところを聞く

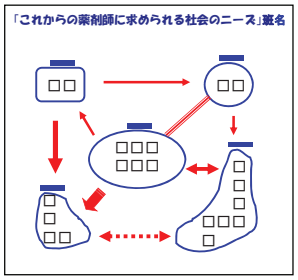

情報の整理

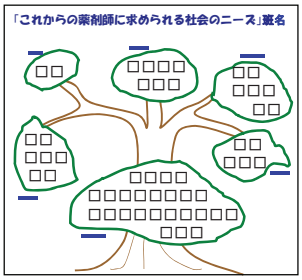

島を作る
情報の整理
孤独なカード


名札を付ける
情報の整理
孤独なカード
名札は具体的にイメージできるように書いてみてください
名 札
名 札
島
名 札
名 札


関連付ける
情報の整理
孤独なカード
名 札
名 札
名 札
名 札

図式化





自由な発想で描いてみてください

これからの作業

「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」

KJ法でニーズを整理して発表

- 4役(司会、記録、発表、報告書担当)を決めましょう！
- 自己紹介とWorld cafeで書いた絵を他のメンバーに説明しましょう。10分
- 次に･･･KJ法　90分

SGDが終わったら･･発表

- P会場(模造紙で！)
- 発表　5分×3班
- 発表順　A ⇒ B ⇒ C
- 合同討議　15分

P会場

15：05

集合

資料をもらったら
Ⅰ・Ⅲチームは荷物ももって
S会場へ移動してください！
Ⅱチームは荷物は後で移動
します！

ＩＡ班

第二部セッションＩでは「これからの社会に求められるニーズ」というテーマでディスカッションを行った。KJ 法によりテーマに関する意見をカードに記入をし、情報の整理を行ったところ大きく分けて７つの島を作成した。

人間性

・自らの死生観の保持
・患者様との距離の短縮
・他者の気持ちの理解推進
・患者様のみならず御家族のことを意識する薬剤師像の確立
・あくまで対象は「薬」ではなく「患者」であることの再認識
・医師への粗相の無い疑義照介、処方提案

スペシャリスト

・自らの適応範囲の拡大
・抗菌薬の適正使用（耐性菌出現の防止）
・自らの専門性を意識（医療機関にて患者様を踏まえた上での薬剤師の個性の確立）
・薬物乱用、競技禁止薬
・臨床研究の推進

ジェネラリスト

・薬剤師同士の交流機会の増進
・新規医薬薬への即時対応力
・製薬企業との協力
・医薬分業、薬薬連携の推進

地域

・積極的なフィジカルアセスメント
・薬局での無菌調剤施設の普及、増設
・化学物質全般の知識習得
・かかりつけ薬剤師の定着化
・地域社会への貢献、地域住民への情報提供
・在宅医療の推進
・OTC 医薬品への関わり
・ファーマシーティカルケア推進

チーム医療

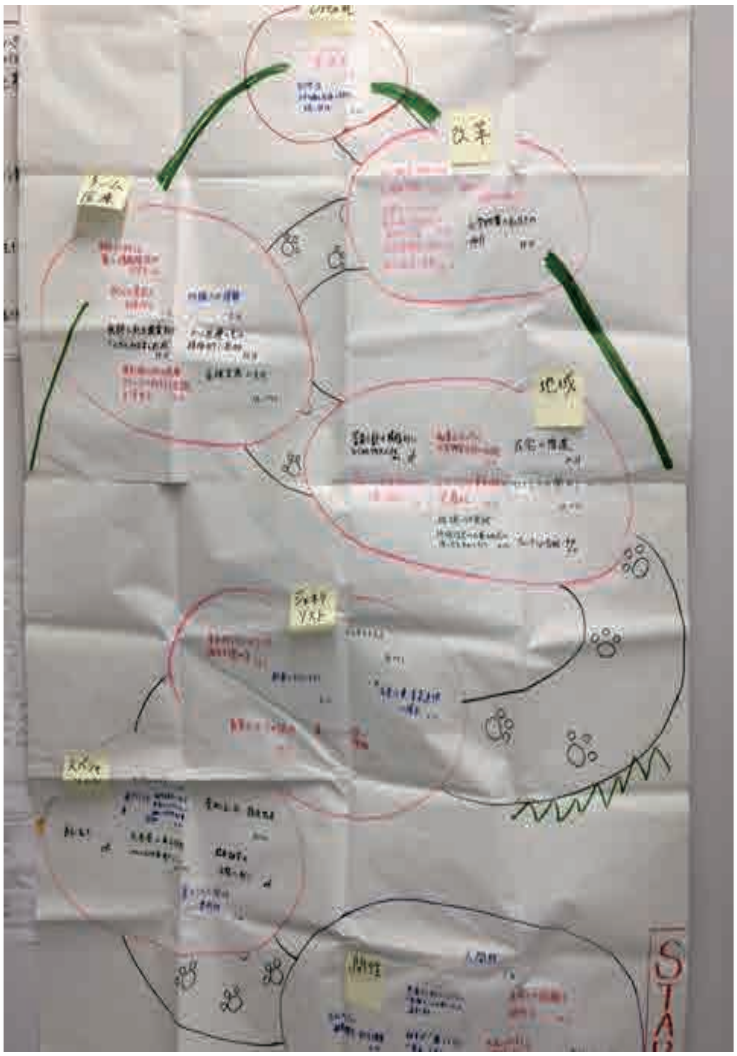
・医師に対して適切な医薬品情報提供能力の習得
・医師を尊重した上での自己意見の提示

・他種医療職種への理解
・医師への処方提案能力、処方不要薬の排除
・チーム医療への更なる貢献
・病棟業務への積極的参画

改革
・必要な検査に伴う採血
・諸外国における調剤
・医師の指示に基づいた処方せんの交付
・生活習慣病に特化した専門認定の充実化

Dream
・ドローンによる医薬品の配達
・日本医療を諸外国へ発信

当方班では、上記記載の島を山登りのイメージにしてまとめた。まず、医療人である以前に患者様のみならずヒトに対する思いやりのある心をもち、豊かな人間性を築くことが大切であると考え、人間性をスタート地点とした。次に薬剤師のスペシャリスト、ジェネラリストとなるため自己研鑽が必要であると考え、第二のステップとした。
地域とチーム医療に関しては、ヒトを対象として現在、取り組んでいる事柄や更に推進していくべきだと考えた希望も含めた内容を集めた。
改革、Dream に関しては、今後社会が求める薬剤師像を元にまとめた。今般、日本の後期高齢社会を踏まえて 10 年後、20 年後には更に在宅医療の必要性が高まることに加え、諸外国の知見を取り入れた更なる医療の発展が期待されると考えた。山を登り積み重ねてきた人間性、知識、技術、信頼など知見のみならずヒトを思いやる精神を備えた薬剤師が今後の社会から必要とされるという考えから、薬剤師が行える範囲を広げた内容を頂点に設置した。
初めから完璧なヒトは存在しない。薬剤師にも同様なことが言え、大学での各講義から学んだ知見を習得することは言うまでもなく、患者様はじめ御家族の方々、多種多様に渡る医療従事者の方々との交流を行い、自らの専門性を活かし、率先して医療に参画することで初めて一人前の薬剤師として活躍できると考えた。


改革
地域
STAR

ＩＢ班

第二部セッションＩでは、「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」をテーマに、KJ法を用いて各々が考える「社会のニーズ」を抽出した。抽出した意見の中で類似した意見は一つのニーズの島にまとめ、それぞれの島を関連付けて図式化した。

【議論の経緯】

（1）要件の抽出と島への分類

ＩＢ班では、班員各自が「求められる社会のニーズ」について考え、要件を思いつく限りカードに書き出した結果、48の要件を抽出することができた。その後、各要件について記入した班員から、その要件に込められた真意や意見を聞き取り、10の島と孤独なカード4枚に分類した（Table1-4）。

Table 1　根に属する島、要件

	島	要件
根	自己研鑽	学び続けられる
		幅広い知識
		生涯学習し続ける
		主体的な勉強
		根拠に基づいた薬物治療の評価ができる
		幅広い専門性を持つ薬剤師
		薬剤師間の「薬剤師」に対する認識の統一

Table 2　幹に属する島、要件

	島	要件
幹	感染症	耐性菌の拡大防止
		抗菌薬化学療法に関する知識の多職種への提言
		感染症対策の知識
	他職種との連携	他職種とのコミュニケーション力
		他職種とのさらに密接なコミュニケーション力
		患者、他職種とのコミュニケーション
		聞く能力、伝える能力
		薬以外の知識、技術
	高度医療への対応	発展した医療技術への対応
		高度医療への関わり
		海外文献に積極的に目を通す
		情報の取捨選択
	孤独なカード	国際化への対応

		医薬品情報の適切な管理

Table 3　枝葉に属する島、要件

	島	要件
枝葉	セルフメディケーションの推進	適切な受診勧奨
		OTC 薬品の豊富な知識
	テーラーメード医療の推進	患者さんが何を必要としているかを考えられる
		一人一人に合った医療を提案できる
		必要とされていることに気が付ける
	災害時の対応	薬剤師という立場に捉われすぎずに動ける
		災害時に中心となって患者さんを支える
		災害時などへの対応
		フットワークが軽い
	患者さんからの信頼を得る	世間からの認知、期待をあげる
		安心できる
		もっと身近な医療人になる
		世間の声に耳を傾ける
		患者さんを尊敬する
		薬剤師免許更新制度
		薬剤師免許の許可内容の細分化
	Dr への負担を減らす	TDM や検査値が読める
		考えていることを正確に伝える
		どんどん意見が言える
	薬学部生願望	処方提案ができる薬剤師
		薬剤師中心（主体）の処方提案力
		処方権を持つ
		自分の判断に責任を持つ
		薬のスペシャリストであるという自信
	孤独なカード	情報発信力

Table 4　種子に属する島、要件

	島	要件
種子	孤独なカード	次世代への教育

（2）島の名前の決定

まず始めに、島の分類では、要件を最も多く含み且つ共通のニーズが明らかであった「自己研鑽」と「患者さんからの信頼を得る」の 2 つの島の名前を決定した。

次に、残り 8 つの島の名前を決める際には、それぞれの島と要件が“誰からのニーズ”に当

てはまるかを中心に考えた。ここで、議論のポイントとなったのは、テーマで与えられた「社会」の定義であった。そこで、我々ＩＢ班での「社会」の定義を明確にするため、どのような人々が属する「社会」を各自が想定しているかを議論した。その結果、ＩＢ班が考える「社会」では“患者・医師・他職種（医師、看護師等）・薬学部生・地域の人々”が含まれる「社会」を想定していることが分かった。

中でも、「薬学部生願望」については、“誰からのニーズ”に当てはまるか最後まで議論を重ねた。特に、処方提案と処方権の要件に注目し、これらの要件がニーズとなる人物を明確にすることを議論の最終目標とした。まず、我々がこの要件を抽出した時に考えた人物について考えてみると“周囲の人”や“社会”といった非常に漠然としたイメージしか持っていないことが分かった。そこで、“だれが何のために必要なニーズ”であるか意見交換をすることで、我々自身つまり“薬学部生が将来薬剤師として患者さんの健康を守り、活躍するために必要なニーズ”であることが明らかとなり、「薬学部生願望」という名前を付けることとした。

（3）関連付けと図式化

我々は、全てのニーズを支える土台として「自己研鑽」が重要であると考えた。そして、「自己研鑽」を積むことで、薬剤師として必要な基本的な知識や能力である「感染症」「他職種との連携」「高度医療への対応」を身に付けるべきだと考えた。また、将来を見据えた「国際化への対応」や安全対策への積極的な介入として「医薬品情報の適切な管理」も薬剤師を支える幹であるとした。さらに枝葉を伸ばし、発展的な知識や能力を持った薬剤師として活躍するためには、「セルフメディケーションの推進」「テーラーメード医療の推進」「災害時の対応」「薬学部生願望」「Dr への負担を減らす」などのニーズに応える必要がある。そして、これらを実践するためには「情報発信力」を兼ね備えていることが重要だと考え、幹と枝葉を繋ぐ位置に配置した。これらのニーズに応え活躍するという実を実らせた後、我々は「次世代への教育」をすることが“これからの薬剤師に求められる社会のニーズ”として重要な１つのニーズだと考え、未来につなぐ種子とした。

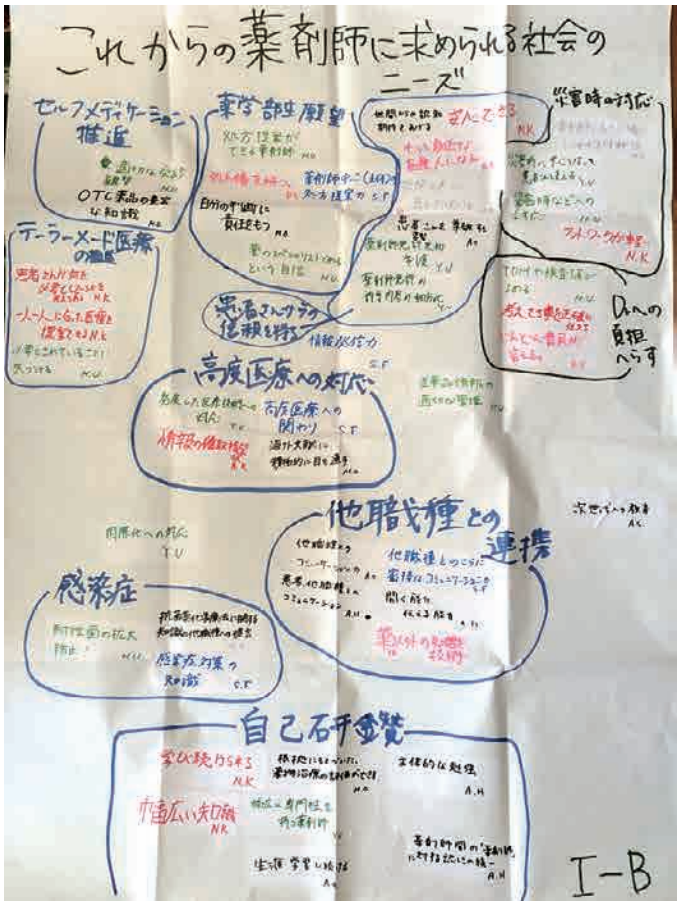


Fig. 1 作成したプロダクト

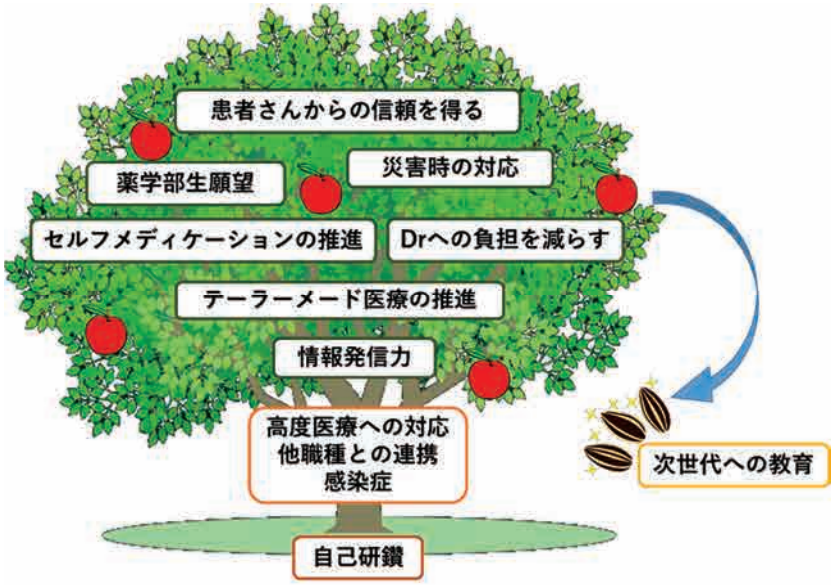


Fig. 2 プロダクトの概略図

ＩＣ班

【テーマ】
これからの薬剤師に求められる社会のニーズとは
【方法】
KJ 法を用いて、IC 班の各メンバーが上記の内容から連想することをカードに記載した。カードは１人につき約５，６枚書いた。書いたカードを集め、そこから同じようなことが記載されているカードは１グループとした島を作っていた。この作業を続け複数のグループを作り、次にグループ毎に関連性があるか、もしあればどういった関連性があるかを話し合いながら確認していった。その後この関連性を分かりやすく表現できるように図式化を行った。
【カードに記載された意見及び作成した島の名称】

- 最終目標①（主に健康な人に向けて）
  - 病気になりたくない
  - 健康増進
  - 心も体も健康に
- 最終目標②（主に治療できない患者に向けて）
  - ターミナルケア
- 最終目標③（主に治療可能な患者に向けて）
  - 治して!!!!
- セルフメディケーション
  - セルフメディケーション
  - 予防医療
- かかりつけ薬剤師
  - お金はかけたくないけど良い医療を
  - 出来れば薬はのみたくないんだけど
  - かかりつけ薬剤師
  - 皆の相談相手
- 治療
  - 創薬
  - DI
  - 世界とのギャップをなくして（ドラッグラグ）
- 啓発
  - 麻薬取締官
  - 教育
  - 情報発信能力
  - 情報の拠点
- 公衆衛生
  - 災害医療
  - 公衆衛生

- データサイエンス（ビッグデータの取り扱い、疫学等）

➢ 専門薬剤師
  - 専門薬剤師
  - 専門家

➢ 必須
  - 薬剤師の仕事を理解してもらう
  - EBM
  - 多様性（薬剤師の仕事は多岐に渡るから）

➢ チーム
  - 他職種連携
  - チームを動かせる力

➢ シームレスな医療
  - 服薬指導のクオリティ
  - 受診勧奨のタイミング
  - 薬薬連携
  - 地域包括ケア
  - 在宅医療への参加

➢ 薬のコントロール力

ピラミッドの外

➢ 医療保険制度
  - 医療費削減
  - 費用対効果

➢ 土台（素質）となるもの
  - 人手
  - 薬剤師の数
  - 知識（薬以外の食品等の知識も）
  - 調剤技術
  - 応用力⇒必須へつながる
  - コミュニケーション力
  - 薬のジェネラリスト
  - 妥協しない

【議論の経緯】

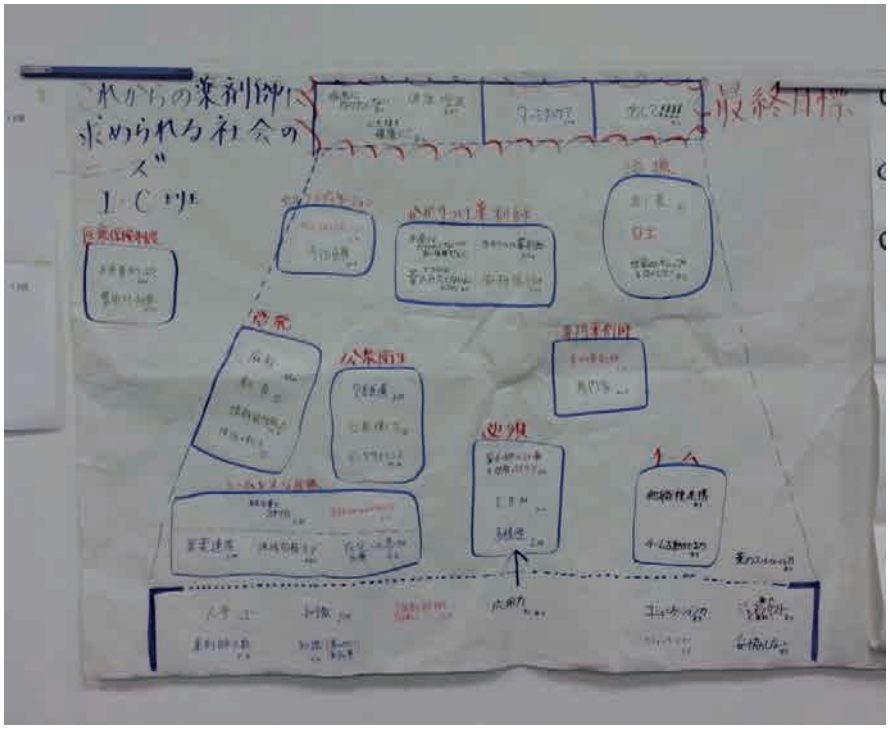
テーマに関して思いつくことをカードに記載する作業は、全メンバーがスムーズに行うことが出来た。共通点のあるカードを見つけていく作業については、カードに記載された内容を読んだだけでは分からない場合は、記載したメンバーにどういう意図で記載したかを確認していった。このおかげお互いに今回のテーマに関してどのように考えているのか、また各メンバーの価値観や考え等を共有することが出来たと思う。

カードの内容を読みグループ化していくと、薬剤師が必要とする根本的な能力や必要性といった土台となる島と、薬剤師として目指すべき目標を含んだ島があるのではないかという話になった。そこで、全体の図式はピラミッド形にし、頂上部には薬剤師として目指すゴール、底辺部にはその目標に到達するために必要な要素を土台として配置した。それ以外の島は土台からゴールに向かうために獲得する内容や求められる役割として配置した。この、各カードに記載されたキーワードの共通項を探して島をつくる作業と、自分達が考えたことを表現できるような図式を考えることに時間がかかった。

薬剤師の最終的な目標に関しては、人口が減り、今まで人間が行っていた作業を機械が行うようになったとしても、健康な人は病気にならないように、病気の人には治療を行い、終末期の人にはターミナルケアでQOLの維持を行うという現在の薬剤師に求められる役割と、２０年後の薬剤師に求められる役割には変化はないというのが、IC班の意見である。この意見は話し合い当初から皆の共通認識であった。

最終目標以外の島については、土台にある「人手」や「薬剤師の数」といったキーワードは現在よりもさらに高齢化が進み、日本の人口が減少していく背景があるためでてきたキーワードである。また、必須の島にある「薬剤師の仕事を理解してもらう」は、まだ現状では薬剤師の仕事の認知が足りないという考えがあったためである。セルフメディケーションに関しても、日本の医療保険が後期高齢化に伴いさらに窮迫していくと予想されるため、今よりも必要になると考えたからである。このように、２０年後でも薬剤師の求められる役割は変化がないが、土台となるものや今後獲得していくスキルは時代に沿って少しずつ変化していくことが、今回のセッションの結果から言えるのではないか。

【実際のプロダクト】



ⅡＡ班

第２部セッション１では、「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」について、ＫＪ法を用いて要件の抽出、及び整理を行った。まず、班員それぞれが考える「これからの薬剤師に求められること」をカードに書き出し、次にそれらのカードを１つ１つ読み上げ、関連が強いカード同士をまとめて島を作った。それぞれの島に名前を付け、最後にそれらの島の関連付けをし、図式化した。

議論の経緯

ブレインストーミングの結果得られた全５３枚のカードは、それぞれの関連性の強さから、６つの島と４つの孤立系に分けられた。以下に、それぞれの島の名前と、それに属するカードの内容を示す。

自己研鑽（より高い情報収集力）

・一般常識　・情報力
・専門性　・知識
・幅広い知識　・正確性
・総合力　・広く深く

患者さんとの情報収集・伝達

・コミュ力　・語彙力
・伝える力　・傾聴力
・リスクの説明　・思いやり
・表現力　・説明できる

薬剤師としての意識

・向上心　・責任
・自信　・判断力
・臨機応変さ　・積極性

医療連携の推進

・在宅医療の発展　・病院―薬局―病院
・薬薬連携　・地域連携強化
・医療以外のサービスとの連携（住宅・スマホ）
・在宅医療　・患者をかこいこむ
・生活につなげる　・いつでも相談可能
・接しやすさ　・親近感
・健康について相談したい　・チーム医療
・処方提案　・すばやさ
・行動力　・薬剤師からの行動

教育

・指導力　・質高い教育

開発
・効率的な治験　　・新薬
・研究マインド　　・発想力
・新薬創出
孤立系
①　・安心感　　・信頼できる
②　・視野の広さ　・グローバル化
③　・知名度　　・実績
④　・不要な薬を減らす

この結果から、「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」は、大きく分けると、「個々の薬剤師の能力の向上」と「医療連携の推進」であることが分かった。

「個々の薬剤師の能力の向上」については、知識の面、コミュニケーション力、及び意識の面という３つの重要な柱があり、その３つすべてを満たしたとき、患者さんから安心していただけたり、信頼していただけたりするようになるだろうという意見が出た。その意見を踏まえ、これら３つの島をそれぞれ線で結び、そしてその中心に、孤立系に属する「安心感・信頼できる」を据える形を取った。

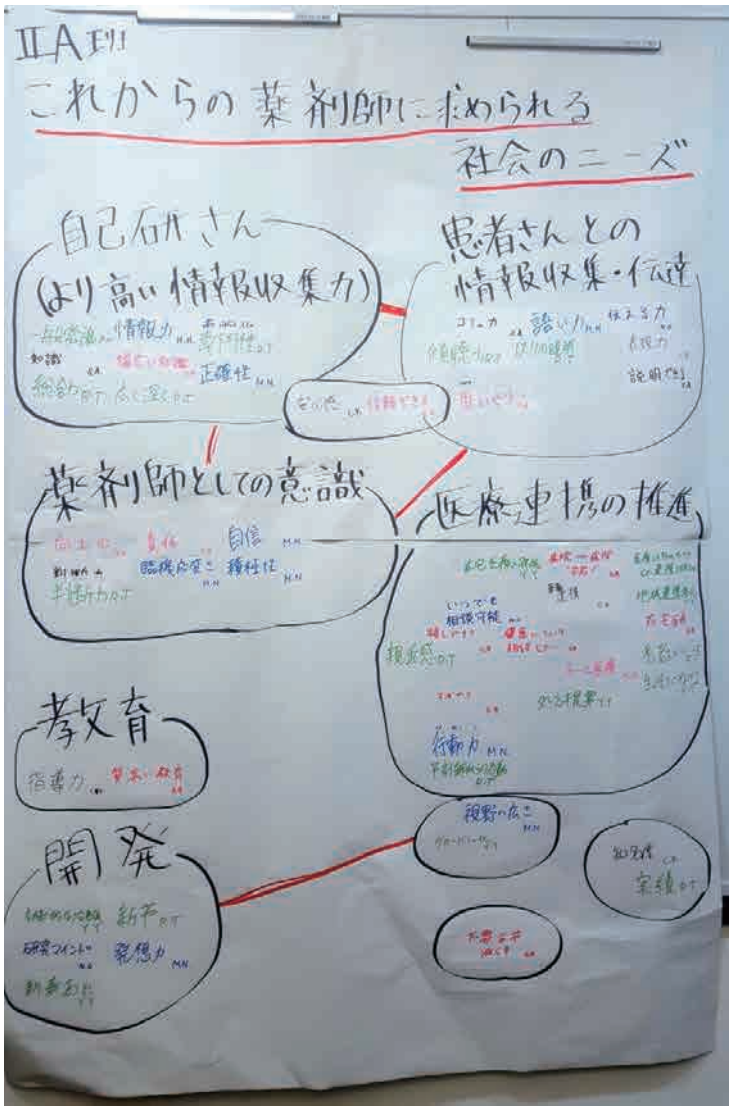
「医療連携の推進」に関しては、薬局薬剤師は、市民の方々が病気になる前に健康について気軽に相談したいと思える存在でなければいけないという意見や、10 年後、20 年後には、今よりもはるかに在宅医療が推し進められているだろうとの考えから、医師や看護師のみならず、ケアマネージャーや介護士、さらには地域の人々との連携の強化に携わっていくことが求められているだろうという意見が出た。「医療連携の推進」の中でも、更に患者さんの病気の進行の段階（未病の段階や終末期の段階など）で細分化していこうという流れもあったが、時間の関係で、大枠でまとめるに留まった。

また、班に、卒業後の進路が製薬企業であるメンバーが３名いたため、新薬の開発という目線からの意見も多く出た。新薬の開発は、すでに日本国内だけでなく、国際共同治験など、世界規模で行われているものであるため、この島は、孤立系に属する「視野の広さ・グローバル化」と関係が強いだろうという結論に達し、これらを線で結んだ。

まとめ

「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」についての議論において、Ⅱ－A班の考えの根底には、「地域における薬剤師の存在感の向上」を追求していくべきだという考えがあったように思われる。そのためには、まず、自己研鑽に励み、薬剤師である自分に誇りと自信を持ち、その上で患者さんのみならず市民の方々と親身に接することで、信頼を獲得することが必要である。そして、10 年後、20 年後にはますます発展しているであろう在宅医療など、地域の人々が協力して支える医療において、中心的な役割を果たしていくことが求められている。

プロダクト


IIA班
これからの薬剤師に求められる
社会のニーズ
自己研さん
(より高い情報収集力)
患者さんとの
情報収集・伝達
薬剤師としての意識
医療連携の推進
教育
開発

ⅡＢ班

第二部では、KJ 法に基づいて『これからの薬剤師に求められる社会のニーズ』というテーマについて議論した。要件が書かれたカードに対して１枚ずつどのような思いで書いたのか述べ、島（グループ）として整理した。結果、全部で８の島となり以下のようになった。

【各島の名前とカードに書かれた要件】

１．患者の窓口

・かかりつけ薬剤師
・話を聞いてくれる薬剤師
・健康のことなら薬剤師
・気軽に相談できる薬剤師
・一番身近な医療者
・親しみやすさ
・地域医療
・地域に近い薬剤師
・話し相手
・町の科学者に対して
・健康管理をしてくれる
・処方箋がなくても会いに行ける
・身近な存在
・患者の情報を一番握っているのは薬剤師

２．積極的なチーム医療

・治療方針の決定に初めから参加
・処方提案に携わる
・チーム医療での立場、責任の拡大
・他職種との関係
・チーム医療での立ち位置の拡充
・他職種との連携

３．情報提供能力

・薬の適正使用
・コンプライアンスの向上
・わかりやすさ
・薬などの細かい情報提供
・分かりやすく指導する
・優しい説明
・分かりやすく伝える
・服薬状況の改善
・納得する医療を受けたい
・外来化学療法

４．モノからヒトへ

・マシーンじゃない（ちゃんと説明する）
・モノ→ヒト
・誰よりも患者のことを考えられる
・患者目線

５．自己研鑽

・幅広い知識
・非常時における現場力・管理能力
・薬以外の知識
・広い範囲の知識
・最新の治療（サプリメントや OTC も）などにくわしい
・在庫管理能力
・話題のこともしっかり調べる
・状況判断能力
・語学

６．信頼できる薬剤師、誠実さ

・信頼できる薬剤師
・誠実さ

７．薬の専門家

・薬物治療のプロ
・薬のプロから薬物治療のプロへ
・肝・腎代謝のプロ
・夢は副作用のない薬を目指して
・薬の専門家
・薬のプロ
・安全な薬で効く薬の作成

８．薬剤師の職域の拡大

・在宅医療の充実
・薬剤師という職のみえる化
・薬剤師外来
・職域の拡大
・薬剤師が何をしているのかあいまい

９．孤独なカード

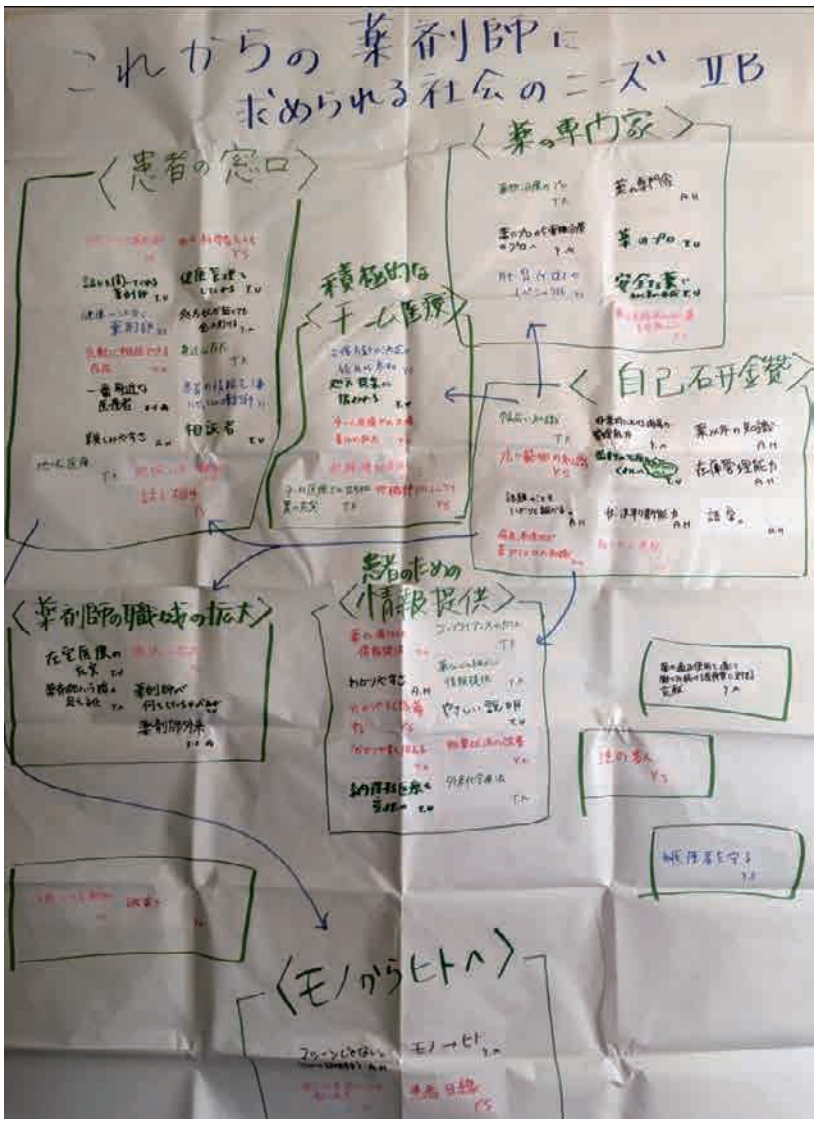
・薬の適正使用を通して膨らみ続ける医療費に対する貢献
・法の番人
・医療者を守る

【議論の経緯】

ⅡＢ班では、『これからの薬剤師に求められる社会のニーズ』というテーマに基づいて約１０分弱の時間を使ってカードに各自が考える要件を書き出した。その後、カードを記入した人がどのような意図で書いたのかを述べながら全員で１枚ずつカードを見ていった。この作業によって、言葉が似ているカードであっても各自がカードに込めた意図が近いものを集めることでき情報の整理ができた。

この段階で大まかに、『患者との関係』『チーム医療』『自己研鑽』『ヒトを意識する』『薬の専門家』『職域の拡大』『情報提供』『信頼・誠実』の８つの島と孤独なカードの９つに分けらた。この段階で与えられていた時間が迫っていたのでそれぞれの島の名前、可能な限り島同士の関係性を同時に考えていった。『自己研鑽』は他のすべての項目を行う際に大切になってくるため全部の項目に関わってくるということ、『患者との関係』はかかりつけ薬剤師や身近、気軽に話せる薬剤師がこれからより一層求められるという意見が多かったことから『患者の窓口』という名前になった。ここで時間が来てしまったためⅡＢ班では、島の具体的な島の関係性と図式化まで行うことができなかった。しかし、ここまでの作業を通して大学や実務実習など学んできた環境は異なるが、薬剤師として将来何が求められるのか？どのような事をしたいのか？または、出来るのか全員がしっかりと自分の意見を持っていることが分かりとても有意義な時間になった。以下に完成したプロダクトを示す。

【完成したプロダクト】


これからの薬剤師に
求められる社会のニーズ
〈患者の窓口〉
〈薬の専門家〉
積極的な
〈チーム医療〉
〈自己研鑽〉
患者のための
〈情報提供〉
〈薬剤師の職域の拡大〉
〈モノからヒトへ〉

ⅡＣ班

議論の経緯

「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」について、KJ 法を用いて考えた。まず班員それぞれがカードに意見を書き出し、ニーズの抽出を行った。その後、カードを一つずつ読み上げながら整理・分類し、島を作っていった。その間、要所で書いた本人がカード内容の説明・補足をし、班員全員で情報を共有した。大きな島には名札を付けたが、名札のつかない単独のカードもできた。島、カードそれぞれの関係性と内容を考慮して配置を調整し、矢印を書いて表現した。特に重要なカードについては赤枠で強調した。

今回の議論では、「知識（の活用）」、「地域」、「連携」、「セルフメディケーション」、「経済」、「情報発信」の 6 つと、名札のつかなかった 4 つの島に分類された。

まず「知識（の活用）」はすべての島と関係しており、様々なニーズがある中でも、やはり薬剤師としての知識とそれを適切に活用することが求められる。具体的には『専門性を活かした服薬指導』や『処方設計・提案』ができることが重要であると考えた。「地域」では、『介護』や『在宅』といったワードが多数みられた。「薬局へ気軽に行ける社会」、「困った時に相談できる薬局」、「調剤薬局でエッセンシャルオイル指導」といったカードもあったが、これらは薬局に限定した表現であったため「地域」とは区別して島を分類した。「連携」では主に薬局と病院の連携として分類し、きちんと連携できるだけの「知識（の活用）」が必要であることと、連携の結果「地域」に貢献することが大切であるとして、関係が深いと考え矢印で示した。「セルフメディケーション」もまた「地域」に貢献できるニーズだと考えた。加えて『OTC』を用いたり、『未病の段階』から薬剤師が介入したりすることで、「経済」の面でも薬剤師のニーズがある。重複投与の防止やジェネリック医薬品の推進といった『医療費の削減』もまた「経済」における薬剤師の重要な役割だ。そして「情報発信」では、最も数多くのカードが分類された。この島では『外向的な性格』が重要であろうと考えた。薬剤師の仕事・役割をもっとアピールし、知ってもらうために『外向的な情報発信』が必要だ。またインターネットやアプリといった ICT を用いた情報の提供という意味でも「情報発信」が求められる。その一方で、「コンピュータではわからない患者さんの気持ち等を考えた処方監査できる薬剤師」も求められているとして、単独の島を示した。

今回の議論を通して、薬剤師には本当に様々な領域でニーズがあると判明したが、それらすべてに共通するカードをプロダクト全体の中心に配置した。それは「倫理観・責任感の強い薬剤師」が求められるということだ。医療に従事する薬剤師として、どの領域においても「命の重み」を忘れてはならない。

プロダクト

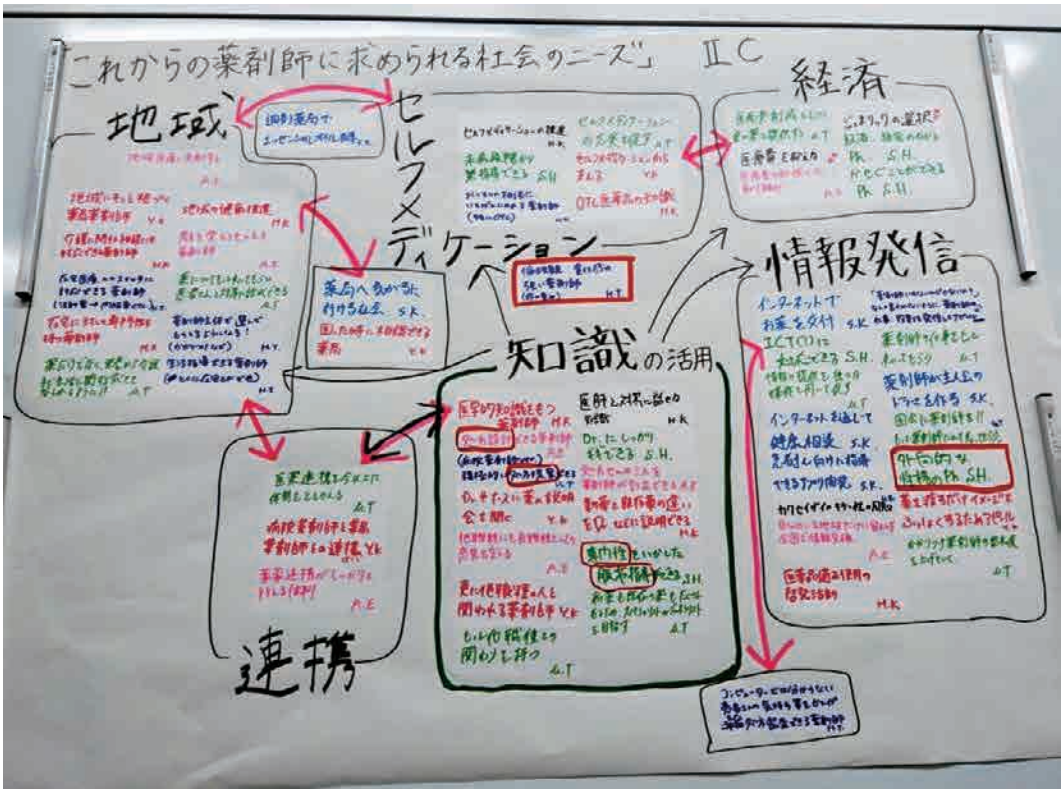


図　実際に作成したプロダクト

プロダクト内容

名札（島の名前） ※島、カードとの関係性	カード・意見（島の内容） ※囲み線部分はプロダクト作成時、赤枠で強調したカード
知識（の活用） 13 カード ※すべての島と関係（特に「連携」と⇔関係）	● 専門性を活かした服薬指導ができる ● 処方設計できる薬剤師 ● （病院薬剤師 ver.）積極的に処方提案できる ● 医学的知識を持つ薬剤師 ● 医師と対等に話せる知識 ● 医師にしっかり疑義照会できる ● 処方箋のミスを薬剤師が訂正できる ● 医師や看護師に薬の説明会を開く ● 他職種にも自職種としての意見を言える ● 更に他職種の人と関われる薬剤師 ● もっと他職種との関わりを持つ ● 新薬と既存薬の違いを医師などに説明できる ● 新薬も既存の薬もたくさんあるためスペシャリストのジェネラリストを目指す

地域 11 カード ※「セルフメディケーション」、「連携」、「薬局へ気軽に行ける社会」、「困った時に相談できる薬局」と⇔関係	● 地域医療に貢献する ● 地域にもっと根付く薬局薬剤師 ● 地域の健康推進 ● 薬だけでなく栄養から介護まで生活に関するすべてを答えられるように！！ ● 介護に関する相談にも対応できる薬剤師 ● 在宅医療へのスイッチに対応できる薬剤師（注射薬→内服薬 etc、 ● 在宅に対して専門性を持つ薬剤師 ● 生活指導できる薬剤師（とくに在宅とかでも） ● 顔を覚えてもらえる薬剤師 ● 薬についてもっと知ってもらい患者さんと対等に話ができる ● 薬剤師主体で選んでもらえるようになる！（かかりつけなど）
連携 3 カード ※「地域」、「知識」と⇔関係	● 医薬連携を今以上に体制を整える ● 病院薬剤師と薬局薬剤師との連携 ● 薬薬連携がしっかりと行える体制
セルフメディケーション 6 カード ※「地域」、「経済」と⇔関係	● セルフメディケーションの推進 ● セルフメディケーションの充実を促す ● セルフメディケーションから支える ● 未病段階から指導できる ● お薬の相談に一番にのれる薬剤師（特に OTC） ● OTC 医薬品の知識
経済 6 カード ※「セルフメディケーション」と⇔関係	● 医療削減をしつつ良い薬を提供する ● 医療費を抑える ● 医療費の削減への取り組み ● ジェネリックの選択 ● 経済・経営のわかる薬剤師 ● かせぐことができる薬剤師

情報発信 15 カード ※「コンピュータではわからない患者さんの気持ち等を考えた処方監査できる薬剤師」と⇔関係（特にインターネット、ICT）	● 外向的な性格の薬剤師 ● 情報の提供を様々な媒体を用いて促す ● インターネットでお薬を交付 ● インターネットを通じて健康相談 ● 患者さん向けに指導できるアプリ開発 ● ICT に対応できる ● 自分のいる地域だけに留まらず全国で情報交換 ● 覚せい剤の危険性の周知 ● 医薬品適正使用の啓発活動 ● 「薬剤師いらないんじゃないの？」などと言われないように薬剤師の仕事・役割を発信してアピール ● 薬を渡すだけイメージを払しょくするためアピール ● 薬剤師の仕事をもっと知ってもらう ● 国会に薬剤師を！もっと薬剤師について知ってもらう ● 薬剤師が主人公のドラマを作る ● かかりつけ薬剤師の認知度を上げていく
名札のつかなかったもの	● 調剤薬局でエッセンシャルオイル指導：「地域」と「セルフメディケーション」の近くに位置 ● 薬局へ気軽に行ける社会、困った時に相談できる薬局：「地域」と⇔関係 ● コンピュータではわからない患者さんの気持ち等を考えた処方監査できる薬剤師：「情報（特にインターネット、ICT）」と⇔関係 ● 倫理観・責任感の強い薬剤師（命の重み）；全体の中心に位置

ⅢＡ班

方法

第二部セッションⅠでは、KJ 法に基づいて「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」をテーマに、各々思いつく限りカードに薬剤師として自分達が社会から求められていると考えられるニーズを書き出し、似たカード同士を集めて、島を作成した。続いて各島に名札をつけ、それぞれの島を関連付けし、最後に図式化した。プロダクト作成後、各々の班で発表した。

議論の経緯

私達の班では、大きな島が 4 つ、うち 1 つは更に 2 つに細分化され、各所に小さな島がいくつかできるような形となった。このような形となった理由としては、まずそれぞれが意見を出していくときに『ニーズ』という言葉の意味に取り違いが生じたことがあげられる。具体的には、社会に求められている『ニーズ』ではなく、自分達が社会に対してどのようなことをしていきたいか、つまり自分達がやりたいことを『ニーズ』としていくつも列挙してしまった。これらの意見と、現在社会から求められている『ニーズ』をそれぞれ島としてまとめた結果、冒頭に述べたような小さな島がいくつもできるような形となった。最終的には、これらの『ニーズ』が今後求められるように自分達が薬剤師として頑張っていこうという結論に達し、プロダクトを完成させた。本筋とはずれた議論に時間を割いてしまったため、プロダクトの細部に拘ることができなかったことが心残りではあったが、お互いの薬剤師像を語り合うことができたという意味ではとても有意義な議論になったと感じた。

各島の名前と内容

【安心安全な生活の確保】

［教育］

・薬学生の教育向上
・薬学生、患者などに薬の事も含めた教育
・一般の方の薬への理解の向上
・知っておくと便利な知識とかをみんなに知らせる
・児童に薬の教育
・食品関係についても詳しい
・人だけではなく動物に対する薬にも詳しい

［健康増進］

・健康相談
・セルフメディケーションの推進
・健康の窓口的な
・セルフメディケーションの推奨
・OTC の活用
・生活習慣病のサポート
・健康のアドバイス、セルフメディケーション
・薬局における健康管理
・セルフメディケーションの推進
・町の科学者として、地域の相談者
・科学のスペシャリスト
・薬局に行かなくても LINE とかで何でも相談できる薬剤師

［その他］
・危険ドラッグ防止
・違法ドラッグ撲滅に貢献
・違法薬物の根絶に向けて

【医療費削減】
・残薬、ムダ削減
・患者の自己負担を安くできる薬剤師
・医療費削減
・残薬をなくす
・残薬の管理
・医療費削減

【薬剤師による積極的薬学的管理】
・チーム医療への積極的参加
・地域との密着
・医療スタッフ間における仲介役
・地域で薬の在庫管理
・医療スタッフ同士で仲良く
・適格な処方鑑査
・高齢者のコンプライアンス向上
・薬だけでなく介護のことにも精通している
・在宅医療の包括的管理
・薬薬連携を密に
・災害、緊急現場で活躍
・救急時に動ける医療者

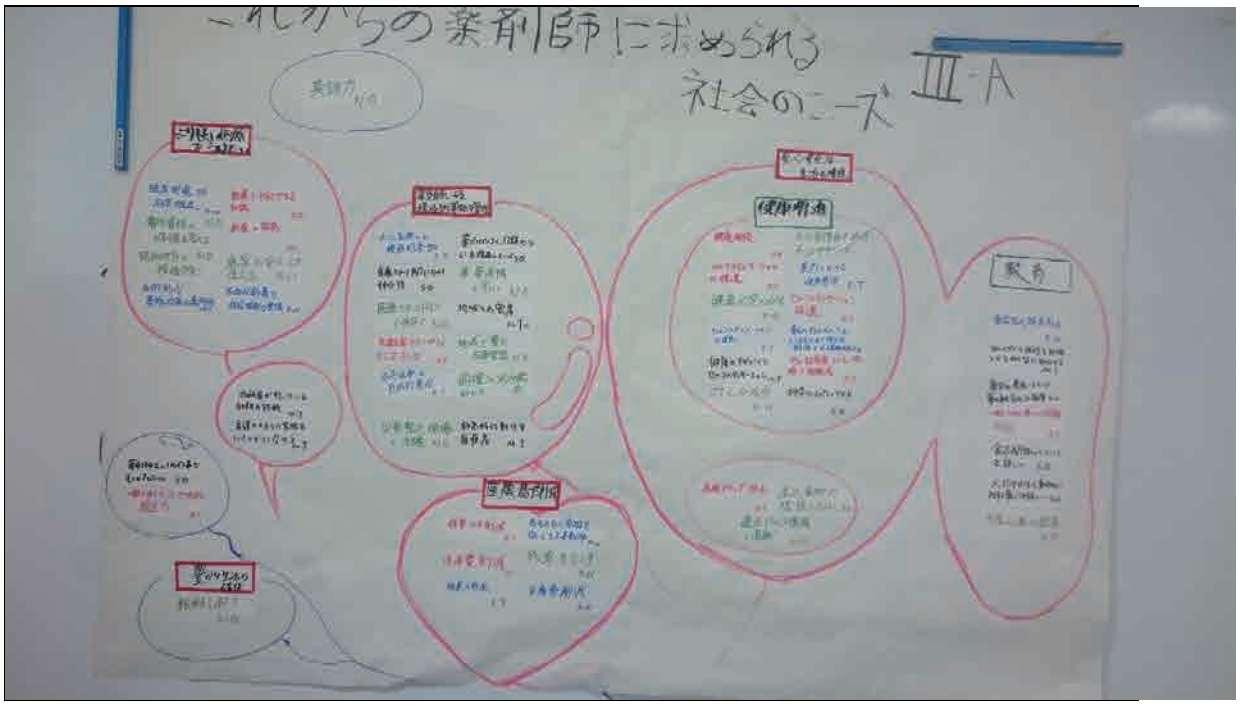
【よりよい医療をうけたい】
・臨床現場での研究推進
・新薬の開発
・専門資格の価値を考える
・麻薬が安心して使える
・臨床研究を積極的に
・高価な新薬の供給体制の整備
・圧倒的な薬物治療の専門性
・内科医が行っている初期の診断
・新薬に対応できる知識
・看護師のように資格をいくつかに分ける

【豊かな生活の確保】
・給料 UP！

【その他】
・薬剤師としての仕事をもっとアピール
・一般の方でもはっきりと分かる役立ち

【その他 2】
・英語力

プロダクト



ⅢＢ班

第二部セッションⅠでは「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」をテーマに議論を行い、自分の求めるニーズや薬剤師という国家資格を持つ全員に求められるニーズを共有・深化することを目的とした。

【議論の経緯】

まずⅢB 班では、議題より連想される内容を各自思いつく限りカードに書き出すことで情報を収集した。そして、一枚のカードを説明するとともに、その内容に関連すると思われるカードをまとめることで島を作成した。続いて、カードに書かれた内容を全員で確認しつつ島に名前をつけて、島々の関係性を話し合った。島は「超高齢化」「地域貢献」「多職種連携」「学び続ける薬剤師」「信頼」の５つに分類された。議論の内容は、いずれも病院・薬局実務実習での経験を踏まえた意見が多い印象であった。

１ 超高齢化社会

・在宅医療　　・在宅での専門性
・ADL の向上　　・ターミナルケア

高齢化社会という言葉は随分前から使われているが、いま日本が直面するのは、さらにその上を行く「超高齢社会」と言われている。終末期を迎え、安心できる在宅医療を提供するために、大量の残薬や薬歴からの副作用予防を徹底する必要があると考えた。

２ 地域教育

対一般の人

・一次予防　　・周囲の人との関わり　　・予防への貢献

対来局者

・門前からかかりつけへ　　・処方医薬品と OTC の使用法と注意喚起
・OTC 薬選び　　・健康に関する幅広い知識

薬局は処方薬の情報提供を行う場であるとともに、地域教育に貢献する場でもある。
かかりつけ薬剤師には、化学の視点や薬物の専門知識以外の幅広い知識を土台として、スペシャリティとジェネラリティを発揮する必要があると考えた。

３ 信頼

・信頼　　・信頼できる人間性　　・患者さんとの信頼関係
・親身になって接する　　・気軽に相談できる　　・気軽に話しかけられる

すべての医療の中心に、患者との信頼関係が必須であるという点から、信頼の島をプロダクト上の他の４島の中心に位置するよう配置した。

４ 多職種連携

今や薬剤師には、様々な医療スタッフとともにチーム医療の一員として高度な医療を提供す

ることが要求されている。そのために必要な土台として、関係職種の理解、コミュニケーション能力、英語力が挙げられる。様々な関係者とコミュニケーションを行い、受動的ではなく、能動的な情報収集・提供を行う必要があると考えた。

院内

・チーム医療中での発言力　・医薬管理栄養の隔てがない部屋　・Dr.と話せる

薬-薬

・薬薬連携　・Dr.と話せる

薬剤師視点

・処方設計　・処方提案

5 学び続ける薬剤師

・最先端技術を身につけ続ける　・研究の進みに取り残されない

・臨床研究　・身近な研究者　・問題抽出力

・問題解決力　・基礎研究の充実

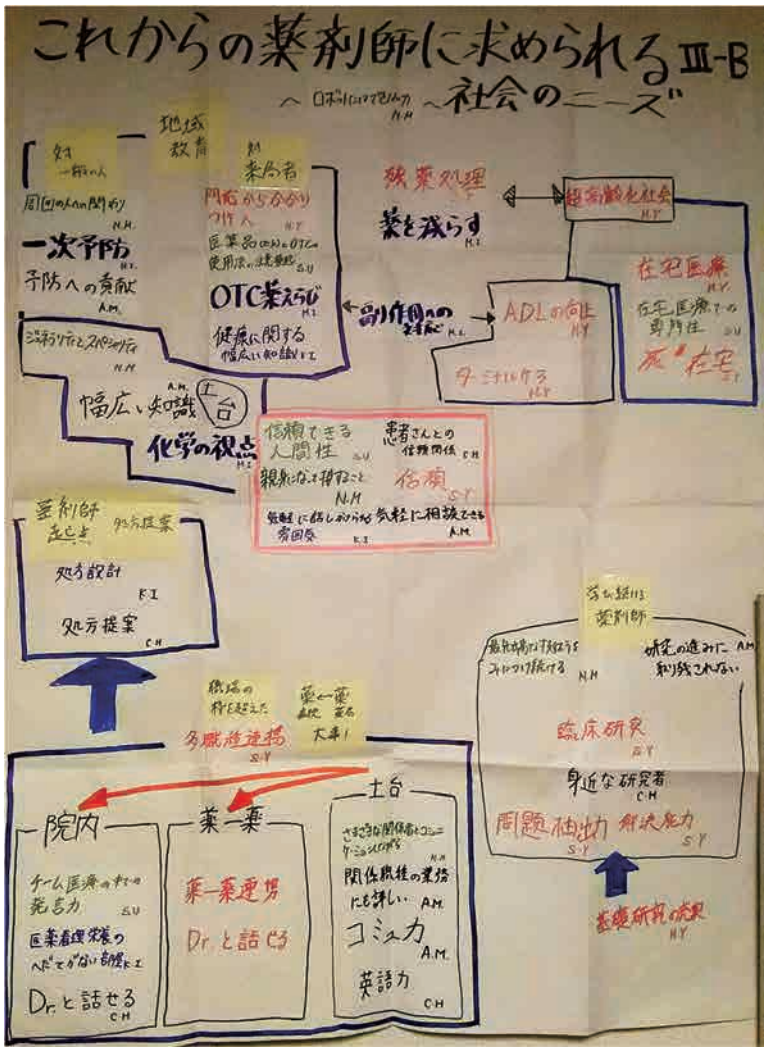
今日の化学技術の進歩は、数々の疾病に対して劇的な効果を示す新薬を生み続けている。しかし新しい治療薬が生まれる一方、副作用をはじめとする様々な問題に直面することと思う。そのよう場合、問題点を的確に抽出して解決方法を提示できることが期待される。私達薬剤師は、最先端の医療を身に着け続けるとともに、基礎研究の観点や臨床研究を意識すべきであり、患者の方にとって最も身近な研究者である必要があると考えた。

議論を進めるなかで、特に盛り上がったのは「超高齢化」と「多職種連携」についてであった。・数ある医療職の中でも、薬剤師は特に化学に特化した専門性を持つ。・向上心や基礎研究、臨床研究への取り組みも薬剤師の職能を活かすために必要になる。・患者が安全に質の高い医療を受けることができるように、薬剤師が他職種と連携してチーム医療を行うことが必須であるが、そもそも薬剤部やナースステーションといった仕切りこそが、医療職種間の壁を作っているのではないか。・医療職種栄養の隔てがない部屋があって良いはずだ、などの意見が多く飛び交った。

【結論】

KJ 法に基づいた情報整理より、ⅢB 班では将来薬剤師に求められる社会のニーズは、機械化では対応できない能力であると考えた。我々にはロボットにはできない力が求められており、超高齢化や地域教育に伴った様々な要因を乗り越えて、人との信頼関係を築く必要がある。

【作成したプロダクト】


これからの薬剤師に求められる Ⅲ-B
～社会のニーズ
地域教育
一次予防
予防への貢献
OTC薬ラボ
健康に関する幅広い知識
幅広い知識
土台
化学の視点
残薬処理
薬を減らす
在宅医療
ADLの向上
信頼できる人間性
患者さんとの信頼関係
信頼
処方設計
処方提案
多職種連携
臨床研究
問題抽出力
解決能力
院内
チーム医療のための発言力
Drと話せる
薬一薬
薬一薬連携
Drと話せる
土台
コミュ力
英語力

ⅢＣ班

【目的・方法】

第 2 部セッション I では「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」について議論を行った。KJ 法によって「10 年後、20 年後に薬剤師が求められる社会のニーズ」に対する各々の考えをカードの書き出し､類似している内容をまとめて一つの島とした｡以下にその内容を示す。

〈人にしかできないこと〉

・協力
・薬剤師同士のつながり
・他の医療従事者、医療機関での連携
・多職種連携
・医師と対等に意見交換
・医師と対等の立場
・英語力
・コミュニケーション力
・聞き上手
・患者、周りの人へのカウンセリング
・個別化医療
・１人１人をよく観察する
・問題発見
・個人に合った治療のコンサル
・少ない情報で状況把握
・すばやい対応

〈知識・技能〉

・ジェネラリスト
・オールラウンダー
・継続的な勉強
・薬の専門家
・科学的思考力
・知識を現場に活かす

〈人間性〉

・患者のために
・頼られる存在

〈理想〉

・予防
・トータルヘルスケア
・バイタルサイン
・コンプライアンスの向上
・緩和ケア
・認知症
・在宅医療
・在宅のケア
・適切な医療コスト
・ジェネリックの推進
・地域密着
・かかりつけ
・緊急対応

〈その他〉

・後輩の芽をつぶさない

【議論の経緯】

今日では全自動ピッキングマシンや全自動錠剤包装機など、調剤の現場における機械化が進んでおり、従来の薬剤師としての職務の多くが機械によって代替されてしまうのではないかという議論が挙がった。10 年後 20 年後はさらに開発が進み機械技術が発展していく中で、機械ではなく人にしか出来ないことが、社会がこれから薬剤師に求めるニーズとなるのではないかと考えた。

人にしか出来ないこととは何かを考え、患者の表情や口調の微細な変化に気づき、患者の気持ち

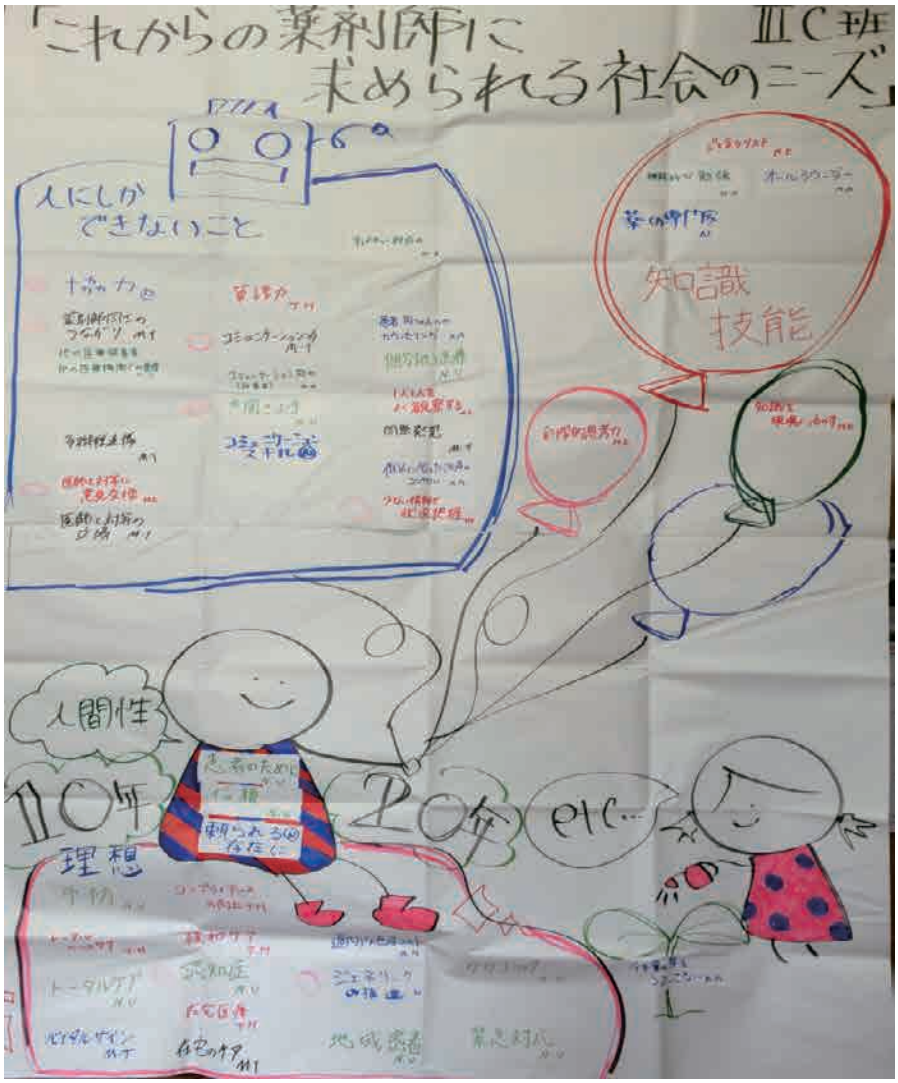
を本当の意味で理解することができるのは、実際に感情をもっている生身の人間だけなのではないだろうかという結論に至った。そのような患者の変化にいち早く気づくためには、患者さんから様々な情報を聞き出すためのコミュニケーションスキルや会話・表情等から得られた少ない情報から状況を把握する能力が重要になると考えた。

また、薬剤師間や他職種間での協力は患者により良い医療を提供するためには欠かせないものであり、そのための関係を上手く築いていけるのも人間ならではないかと考えた。実務実習等を通して医師と薬剤師では、まだまだ医師の立場の方が上であり、薬剤師が対等に医師に意見することが出来ていないように感じる場面が多かったという意見があった。薬剤師が医師と対等な立場となり、意見を交換することができなければ、医療という現場において薬剤師という職種の力を最大限に発揮することはできない。医師と対等に意見を交換できるような関係を築くことも、人にしか出来ないことであり、薬剤師として重要であると考えた。

患者の気持ちを理解することができても、その問題を解決できる手段を持っていなければ意味はないのではないかと考えた。問題を解決するためには、自身が薬についての知識はもちろんのこと、栄養学や看護学などあらゆる知識を身につけたジェネラリストとなることが必要であると考えた。社会が薬剤師に求めるものとして、患者のために行動し、信頼され、頼ることのできる存在であることも大事であるという意見も出た。

上記の事をふまえたうえで、１０年後２０年後は薬に関することだけでなく、トータルヘルスケアを行っていくことを基本とし、疾病にかかってからではなく予防の段階から積極的に関与していける薬剤師。また、高齢化が進み在宅医療を受ける患者や認知症の患者が増加することが予想されるため、そのような患者さんに寄り添い、二人三脚で患者の病気だけでなく人生そのものに寄り添っていける薬剤師が今後の社会に必要とされていくのではないかと我々は考えました。

【プロダクト】



第二部

「求められるニーズは何か？」

セッションⅡ

「10 年後、20 年後の将来を想像しながら、
社会のニーズに真に応える自分を演じてみよう」

～多様な薬剤師の活躍の場を考え、演じてみよう～

第二部
セッションII

10年後、20年後の将来を
想像しながら社会のニーズに
真に応える自分を演じてみよう
~多様な薬剤師の活躍の場を考え、
演じてみよう~

第一部では、

World Café

**プロフェッショナルを目指して：
私たちの進路と夢**

- 自分の大学の好きなことを話せましたか？
- 6年間で成長したことについて
  共有できましたか？
- 10年後の活躍をイメージできましたか？

第二部セッションIでは、

ＫＪ法

求められるニーズは何か？

これからの薬剤師に求められる
社会のニーズの
抽出と整理ができました

10年後、20年後の将来を想像しながら社会のニーズに真に応える自分を演じてみよう

これからの作業は、

1. 司会、記録、報告書担当の3役を
   決める
2. KJ法のプロダクトの見直し：
   島の名札を確認する

10年後、20年後の将来を想像しながら社会のニーズに真に応える自分を演じてみよう

3. SGD：
   KJ法で整理した社会のニーズを盛り込んで、
   それに応えている将来の自分の姿をイメージ
   して劇を作成する

10年後、20年後の将来を想像しながら社会のニーズに真に応える自分を演じてみよう

3. SGD：
   KJ法で整理した社会のニーズを盛り込んで、
   それに真に応えている将来の自分の姿を
   イメージして劇を作成する

1 テーマを決める
2 盛り込むニーズを決める
3 場面を設定して
4 シナリオを作成し、配役を決める
5 ①劇のテーマ、②場面のタイトル
  ③劇の要点 を模造紙に

模造紙に・・・

①テーマ　望まれるタクシードライバーの姿
②場面のタイトル
　全ての客に、安全に快適に目的地
　まで運ぶタクシードライバー
③劇の要点
・急いでいる客にできるだけ早く目的地に着くよう、混んでいる大通りではなく、狭いが空いている近道を選ぶ。
・大雨の中、身体の不自由な客の乗降時、濡れないようさりげなく気遣いをする。
・無理な要求をする客を、普通どおり安全的確に目的地まで運ぶ。
・
・

10年後、20年後の将来を想像しながら社会のニーズに真に応える自分を演じてみよう

4. 発表：
10年後、20年後の将来を想像しながら、社会のニーズに真に応えている自分を想像して劇で表現して下さい。

作業時間は100分間

作業終了後は休憩
その後、P会場に

17:50　集合

・発表 5分 ＋ 質疑応答 2分x 3班
・発表順　B ⇒ C ⇒ A
・合同討論　35分

ＩＡ班

【目的・手法】

第二部セッションⅠ「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」の内容を踏まえ、求められる社会のニーズの要件を抽出し、整理した。セッションⅡでは、「10 年後、20 年後の将来を想像しながら社会のニーズに真に応える自分を演じてみよう」というテーマのもと、社会のニーズに応えている場面を設定し、劇を作成・発表することで、具体的に社会のニーズについて討議した。

【経緯】

セッションⅠの内容を踏まえ、社会のニーズについて整理すると、以下の 3 つの要件が挙げられた。

・高齢化に対応する
・チーム医療
・慢性の患者を在宅へ

以上から、今後さらに深刻となっていくだろう「高齢化」について焦点を当てた。「高齢化」にどう対応するか、何を求めるのかを考えるうえで、現在の状況を議論したところ、以下の 4 つの意見が挙げられた。

・一度に服用する薬の種類が多い
・服用する数を減らしたい
・病院に行くことが面倒である
・家でも薬物治療を受けたい

以上の意見の中でも、「病院に行くことが面倒である」、「家でも薬物治療を受けたい」という意見においては、10 年後、20 年後には対応ができる、改善ができるのではないかと考え、場面を設定することにした。

【場面設定】

テーマ　：　高齢化により在宅が必要になったら・・・
タイトル　：　「在宅ケモにケモカーで向かう薬剤師」

劇の要点

① 外来ケモが在宅でできる。
② 薬剤師が採血、投与、検査ができる。
③ レジメン内なら薬剤師が緊急時の処置が可能。
④ 患者さんが家で安心して治療を受けられる。

＜設定＞

場所：自宅
患者：化学療法（術後）　67 歳　男性

妻が軽度の認知症

娘 40 歳主婦　　二世帯住宅

主訴：病院に行くのが面倒である。家でケモを行いたい。

患者の要望に応え、在宅ケモ開始。

本日、2 回目の訪問である。

＜あらすじ＞

20 年後、在宅でケモができるようになり、薬剤師が採血、投与、検査を行えるようになった。在宅でケモを行っている患者のもとに、薬剤師がケモカーで在宅ケモに来た。薬剤師は患者さんに面談をした後、採血を行う。採った血液は、ケモカー内で別の薬剤師が血液検査をし、結果を別の場所で待機している医師に送信し、医師がケモの実施を指示する。医師のケモ実施を受けると、薬剤師がケモカー内で抗がん剤を調製・鑑査し、自宅にいる患者へ投与する。患者の血圧、心拍数はケモカー内でモニタリングできるようになっており、薬剤師が在宅にいる必要がなくなっているため、薬剤師はケモカーに乗り、別の患者のもとへ向かう。そこで、先ほど投与を開始した患者が急変する。患者家族が急変に気づき、薬剤師へと連絡するが、同時に薬剤師もケモカー内のモニタリングで患者の異変に気づき、患者のもとへ駆けつける。急変した患者のもとに着いた薬剤師は、すぐに医師に連絡を取り、レジメン通りの緊急処置を行う許可をもらい、処置をする。対応が早かったため、患者は無事に助かった。

ＩＢ班

【目的】
第 2 部のセッション 1 で「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」について KJ 法を用いて抽出及び整理を行った。セッション 2 では、KJ 法で整理した社会のニーズを盛り込み、それに応える将来の自分の姿をイメージし劇で表現した。

【議論の経緯】
10 年後、20 年後には今よりも機械化が進むと考えられる。機械化が進むなかで薬剤師が人だからこそできることに今よりも時間を割けるのではないか、と考えた。また 10 年後、20 年後は高齢化が進み、看取りが家で行うことが増えると予想される。そのため私たちの班では、テーマを「在宅医療における、薬剤師と患者の関わり方」とし、劇を作成した。
盛り込む要素としては、「在宅業務の増加」、「フィジカルアセスメントができる薬剤師」が挙げられた。
在宅医療は現在も行われている業務であり、10 年後を意識した際に何が今と異なるかも議論にあがった。現在と異なることとして、「在宅に時間をかけることができる」、「医師への処方提案の際に薬剤師主体で調剤変更ができる」ことが挙げられた。

【場面設定】
ポイントは以下の 3 点である。
・調剤はすべて機械化。薬剤師が在宅の患者を訪問できる時間、人員が増えた
・フィジカルアセスメント、患者からの情報聴取により薬の副作用を発現
・医師へ薬学的観点からの処方内容の変更を提案

【ストーリー】
10 年後の 2026 年、調剤はすべて機械化され、薬剤師が在宅の患者を訪問できる時間、人員が増えた。在宅の時間を増やすことが可能となったため、一軒当たりに割く時間が増え在宅訪問の際にフィジカルアセスメントなども行うことができるようになった。
薬剤師が患者宅に訪問しようとした際、訪問看護師より患者さんの体調がすぐれないことを聞く。そこで薬の副作用を疑い患者宅でフィジカルアセスメントを行い、患者さんから話を聞くと「全身がだるい」、「手足のしびれ」、「尿の色が赤褐色になる」、「頻脈」などの症状が見られ、「横紋筋融解症」が疑われた。そこで薬剤師が担当医師に電話をかけ薬剤の変更を提案した。医師は、薬剤師が言った提案を採用し薬剤変更となった。日頃から医師と薬剤師の間に信頼関係があるため薬剤の変更がスムーズに行われ、患者さんの安全が守られた。

ＩＣ班

【目的】

第二部セッションＩのＫＪ法で抽出・整理した内容をふまえ、「10 年後、20 年後の将来を想像しながら社会のニーズに真に応える自分を演じてみよう」というテーマを劇で表現する。

【議論の経緯】

１，ＫＪ法のプロダクトの見直し

セッションＩでは薬剤師に求められる社会のニーズとして大きく①健康増進、②治療、③ターミナルケアの３つがあるという結論になった。劇のテーマを決めるため、これら３つで共通することは何か考えた結果、最終的に社会が求めるニーズとは患者に寄り添い、それぞれの患者の希望に沿った対応をすることであるという考えに辿り着いた。

２，テーマの設定

セッションⅡでは 20 年後の社会のニーズについて表現する必要があったため、それについてさらに討論した。将来は穿刺ができるのではないか、処方権が薬剤師にも与えられるのではないかなど様々な意見が出されたが、未来も根本的なニーズは変わらないという結論になり、これを劇で表現することになった。そこで、私たちは「医療の進んだ未来でも患者の思いに沿う医療」という劇のテーマを設定した。シナリオの中にはセッションＩのＫＪ法で出された意見をできるだけ組み込むようにした。

３，シナリオの作成

＊医師と家族が積極的治療に同意

患者は高齢女性。医師に肺がんと診断される。早期治療を行えば治る可能性があるため即入院するよう告げる。患者家族も治してほしいと懇願。一方患者は何も話さず、冴えない表情をしている。

＊薬の治療前説明の時患者は治療に後ろ向き

入院が決まり、患者のもとへ薬剤師が抗がん剤の説明をしにいく。患者は医師や家族に伝えられなかった思いを薬剤師に伝える。“もう十分生きたし、幸せだったから治療はせずに家でゆっくり過ごしたい…。副作用も強いみたいで怖いし…。”と。

＊医師と薬剤師が治療法について大激論

薬剤師が患者の思いを医師に伝える。医師ははじめ自分の考えを曲げなかったが、薬剤師の強い主張に“少し考える”と告げる。

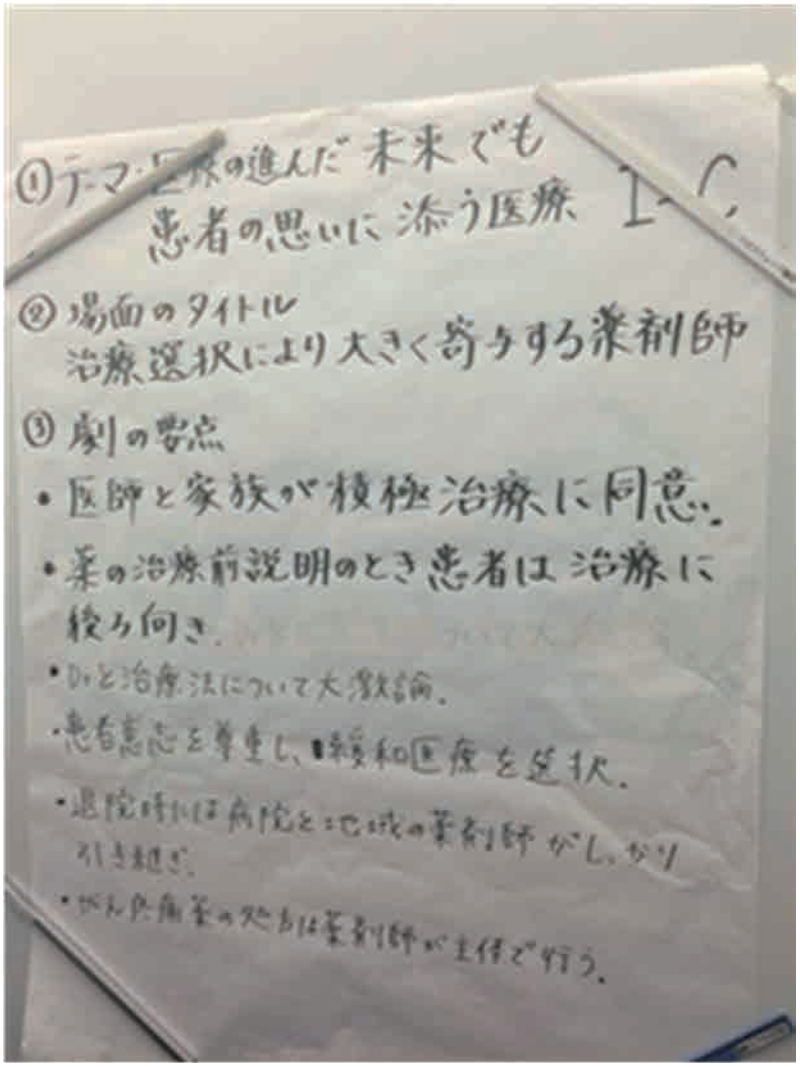
＊患者意志を尊重し、緩和医療を選択

＊退院時には病院と地域の薬剤師がしっかり引き継ぎ

医師と病院・薬局薬剤師は患者の治療方針について情報を共有する。また、病院・薬局薬剤師は今後も薬薬連携を行うことを決めた。さらに薬局薬剤師が患者に服薬指導を行うとともに何かあればいつでも相談するよう伝える。

＊がん疼痛薬の処方は薬剤師が主体で行う

薬剤師が薬の専門家として積極的に処方提案を行っていく。



ⅡA班

セッションⅠではKJ法を用いて「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」の抽出・整理を行い、Ⅱチーム内での発表を行った。セッションⅡでは、セッションⅠで整理した「社会のニーズ」を踏まえて、それに応える薬剤師を劇で表現した。

【プロダクト】
テーマ：地域医療の中での薬剤師

場面のタイトル：一(いち)学生が薬剤師として成長するまで

劇の要点：
・実務実習で地域に根ざした薬局薬剤師を志す
・10年後における患者、家族への教育
・市民に対しての一次予防への積極的参画
・次世代の薬剤師育成

〈配役〉
一学生（後のスーパー薬剤師）：田野邊　　ナレーション：横須賀
指導薬剤師：川上 先輩薬剤師：大平 医師：野村
患者：元井　　患者家族：青木　　市民（後の実習生）：秋山

〈話の流れ〉
20XX年、一学生が薬学部に入学

4年後、一学生の薬局実習が始まる
指導薬剤師とともに在宅の患者さんを伺う中で、一学生は在宅医療に興味をもつ

一学生は国家試験に合格後、薬局薬剤師として働き始める
先輩薬剤師とともに在宅の患者さんの元へ行き、先輩薬剤師が医師の質問に的確に答え、さらに提案もする姿に感動し、目標とする

自己研鑽・経験を積み、新人薬剤師はスーパー薬剤師へと成長する

スーパー薬剤師は在宅でがん治療中の患者さんの元へ行く
そこでは、患者さんの副作用の訴えに耳を傾け医師に処方の提案をしたり、患者さんとその家族に的確な情報提供をしたりと“在宅医療での薬剤師の存在感”を発揮した

さらにスーパー薬剤師は市民講座を開催し、市民向けに一次予防についての講演を行う
その講演を聞いていた市民の中に、スーパー薬剤師の活躍に感動し薬剤師を目指す市民がいた

数年後、スーパー薬剤師のもとに実習生が来る
その実習生はあの市民講座をきっかけに薬剤師を目指した市民だった

【議論の経緯】

セッションⅠでの発表後、ⅡA 班の特徴として「教育」に関しての“島”の存在を確認した。この特徴を活かすべく、「教育」に焦点を当てて劇を作成することとし、「薬剤師に求められる教育」がテーマとして挙がった。薬剤師が教育する対象（医療従事者・患者さん・市民・学生）を挙げていくと、「教育の対象である薬学生が成長し、教育する立場になる」という流れがみえてきた。

教育の場面としては、実務実習（薬学生への教育）、後輩へ教育（＋自己研鑽）、医療従事者への教育、患者さん・その家族への教育、市民講座の開催（市民への教育）が挙がった。さらに 10 年後には、在宅医療そのものや在宅での抗がん剤治療が一般化し、抗がん剤の副作用の予防・対策などにおいて薬剤師の職能が十分発揮されているのではという考えから、登場する患者さんの設定は「在宅でがん治療中の患者さん」とした。また、在宅医療や市民講座といった場面設定を考慮し、ALL 薬剤師の中でも“薬局薬剤師”に焦点を当て、最終的には、「地域医療の中での薬剤師」がメインの、「薬剤師に求められる教育」はサブのテーマとなった。

ⅡＢ班

【目的】

第二部セッションⅠで抽出および整理した「薬剤師に求められる社会のニーズ」に基づき、10 年後、20 年後の将来、社会のニーズに真に応える自分たちを表現する。

【討論の経緯】

1. テーマを決める

私たちの班では、薬剤師に求められる社会のニーズについてより具体的に討論し、「病院・薬局の薬剤師」に対して、「患者」が求めるニーズを主題として捉えることにした。薬剤師が将来活躍できることという視点から、患者が薬剤師に求めていることという視点に立ち戻り、自分たちが過去に患者として薬剤師の応対に感じたことをもとに、表現したいテーマを「患者のことを考えられる薬剤師」と定めた。患者が薬剤師に求めるニーズは将来も今と大きくは変わらないと考え、① かかりつけ薬剤師がより身近な存在になる、② マニュアル通りの対応ではなく臨機応変な温かみのある対応、③ チーム医療における薬剤師の薬のエキスパートとしての明確な立ち位置、薬剤師外来の普及、④ 薬局と病院のスムーズな連携、を表現することとした。

2. 盛り込む要素

患者の相談窓口

モノからヒトへ：調剤メインから対人メインの業務、臨機応変な対応

チーム医療：薬のエキスパートとしての薬剤師

薬剤師外来

3. 場面、ストーリーの作成

場面：地域の薬局と病院の連携

劇の要点：

① 地域のかかりつけ薬剤師は、患者が相談しやすい窓口となる

② 患者から十分情報収集を行い、必要に応じて病院薬剤師との連携をとる

③ 薬剤師外来を通して患者の問題を整理し、医師による診察をサポートする

④ 医師の診察に薬剤師が同席することで、患者の問題解決に薬剤師が貢献する

ストーリー：

薬剤師と患者 <例１ ―かかりつけ薬剤師の働き―>

地域のかかりつけ薬局に一人の患者(おじいちゃん)が訪れる。その患者は糖尿病を患っていることから、運動療法を医師から指示されていたが、ひざが痛くてできていないと薬剤師に相談する。薬剤師は、患者の住居の近隣に市民プールがあり無料で利用できること、プールでの運動はひざへの負担が少ないことを説明する。さらに、食事療法について、高齢者の一人暮らしのため、外食やコンビニ食が多いことを聞き出す。かかりつけ薬剤師とし

て、患者の家族構成を把握している薬剤師は、近くに住んでいる息子夫婦に協力してもらってバランスのとれた食事をすることをすすめた。

薬剤師と患者 <例 2 ―薬局と病院の連携―>
地域のかかりつけ薬局に、病院で化学療法を行っている患者から、手足がしびれるという連絡が入る。薬剤師は、患者から症状を聞き出し、薬局単独での対応では限界があり、急を要する症状であると判断し、患者の受診している病院と連携をとることに決める。患者には病院へ受診することをすすめ、病院へは患者から得た情報を事前に伝える。病院では、必要に応じて病院薬剤師が医師の診察前に患者と面談することで、薬の投与量・副作用について情報を整理する。さらに、患者の診察には医師とともに薬剤師が同席することで、患者の問題解決に薬剤師が貢献する。

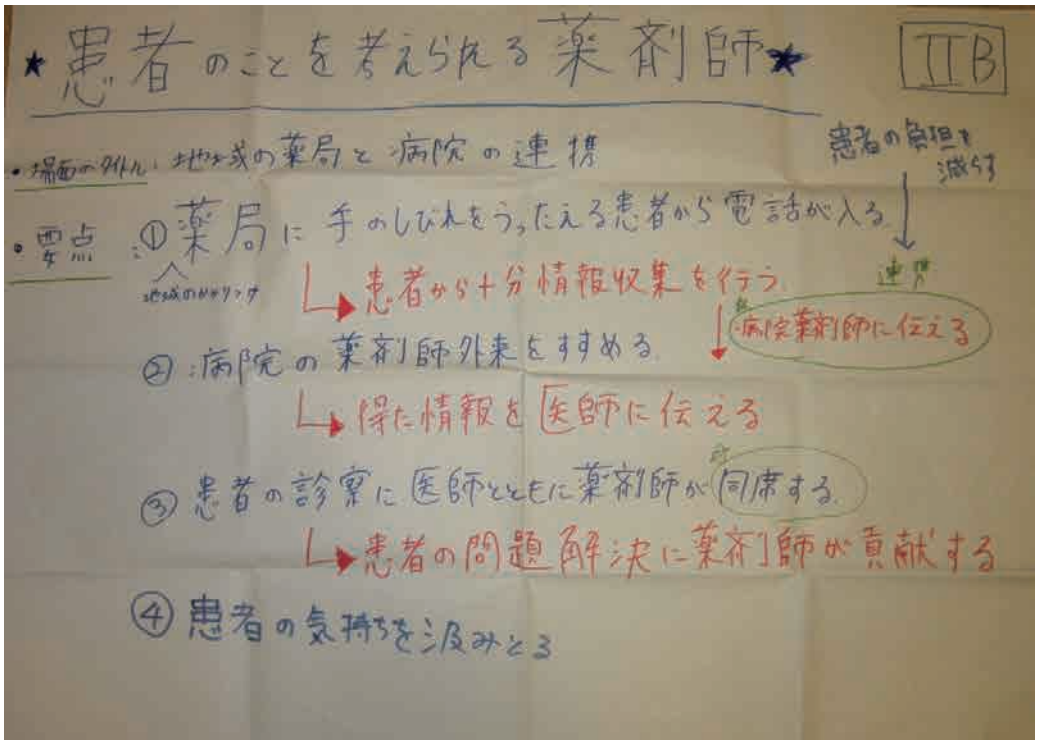


図 1. 第二部 セッション II プロダクト

ⅡＣ班

10 年後、20 年後の将来を想像しながら社会のニーズに真に答える自分を演じてみよう
～多様な薬剤師の活躍の場を考えて演じてみよう～

【目的】
第二部セッションⅠにおいて KJ 法を用い抽出・整理した社会のニーズを、寸劇を通して表現する。

【議論の経緯】
今回の議論では 10 年後 20 年後の社会のニーズに真に応える自分を演じようというテーマであり、kJ 法の解析を基に議論を行った。KJ 法の解析は、第二部セッションⅠにおいて KJ 法を用いて抽出した薬剤師のニーズを大まかなにカテゴライズし、いくつかの島を作ることにより行った。私たちは将来 IT 化機械化が進み薬剤師の仕事も少なくなると考えた。また、IT 化機械化が進んだ中で薬剤師ができること・薬剤師でなくては出来ないことを劇で伝えたいことに決定した。議論を交わす中で劇のテーマとして挙がったのは地域医療である。地域医療の中でも特に地域に根差した在宅をテーマとして選択した。以下にプロダクトと劇の場面設定やあらすじについて示した。

【プロダクト】
テーマ　在宅での薬剤師の役割
タイトル　在宅療養中の患者に IT 化が進んだ中、より専門性を発揮する薬剤師
要点　①薬の管理がロボット化しても薬の監査と服薬指導は薬剤師が行う
②患者家族の相談に対して情報収取と提供を行う
③必要に応じてフィジカルアセスメントが出来る
④多職種と連携がとれる

【あらすじ】
妻の自宅療養中の夫婦のもとに薬の管理を行うロボットを連れた薬剤師が訪れた。薬剤師は患者と患者家族に薬剤師自らが薬をセットしたロボットの使用方法と保管方法の指導を行った。薬剤師は患者との会話の中や患者の訴えから患者のニーズを感じ取りや薬剤師として対応できる範囲で患者のニーズを解決した。

【場面設定】
10 年後 20 年後ということで IT 化が進み、薬剤師の仕事も機械化が進んだ未来を舞台にした IT 化が進んだ未来において機械が出来ること、薬剤師が出来ることを比較し互いの仕事を明確に区別することにより未来のニーズに薬剤師だからできることを意識しストーリーを作成した。ストーリーは現在の在宅でも問題となっている残薬や薬の管理などを行えるロボットが出来たという設定で妻の自宅療養中の夫婦の所に薬剤師が薬を管理するロボットをつれて訪れ、薬剤師として患者のニーズに答えていく。

ストーリー中ではどんなに IT 化が進んでも最終的に薬の管理を行うのは薬剤師の仕事だと伝える為、ロボット（高度医療機器）に薬をセットし確認することと使用方法を伝えた。　患者の不安や疑問を解消すること、薬剤師同士の連携を表現する為、患者のサプリや健康機能食品に対する疑問に対して薬局の薬剤師に連絡をとり疑問を解決するシーンをいれた。

患者の不安の解消と副作用の発現の確認、多職種との連携を表現する為、フィジカルアセスメントを行い、医師に報告し医師自らもう一度フィジカルアセスメントを行うように促した。

ⅢＡ班

第二部セッションⅠにおいてKJ法を用いて、「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」の抽出と整理を行った。第二部セッションⅡでは、セッションⅠの内容の見直しと、「10年後、20年後の将来を想像しながら社会のニーズに真に応える自分を演じてみよう」というテーマを受け、劇を作成し、発表した。

議論の経緯

まず、セッションⅠにてまとめた社会のニーズについて内容を見直した。私たちの班では、薬剤師本位な意見（薬剤師が行いたいこと）に偏らず、社会のニーズというものを意識した議論ができていたであろうという結論に至った。

次に、劇の作成に取り掛かった。いくつかある島の中から、将来の自分たちが想像しやすいと感じた「安心・安全な生活の確保～健康増進～」を中心に考えた。この島の中には、「セルフメディケーションの推進」や「薬局における健康管理」などのキーワードが多く出ていたが、その中でも「**薬局に行かなくてもLINEなどでなんでも相談できる薬剤師**」という10年・20年後の将来では一般的になっているかもしれない、この特徴的なキーワードを軸に劇を作成していった。

私たちの班では、10年・20年後の将来は、「**アプリなどのITツールを活用し、今よりももっと気軽に薬剤師に相談したい**」というニーズがあると考えた。そもそもITツールなどを使わずとも、薬局に直接来ればいいのではないか、今までのように薬局に電話をかけてくればいいのではないかという意見も挙がったが、薬局によっては薬剤師が忙しそうにしていることでゆっくりと対応ができない、かつ、その状況を相談者が見て、相談してくれないこともあり得るという意見が出た。また、都心部より離れた地方によっては、病院の数はもとい薬局の店舗数も少なく、薬局に気軽に行ける環境とは限らないという地域格差も浮き彫りとなった。

議論を進めていくにつれ、問題点も見えてきた。仮に、スマートフォンアプリであるLINEのようなものを導入し健康相談などを受けるとなると、対応する薬剤師の時間外業務が増えるのではないか、薬剤師が数名しかいない薬局では薬剤師の業務内容だけが増え、本来の業務が回らないのではないか、薬剤師にかかる負担が大きいのではないか、と現実的な問題も見えてきた。これらは、実際には薬剤師数を増やすこと、地域格差をなくすことで多少解決する問題なのかもしれない。だが、今回はそれを明言することは避け、社会や患者へのメリットを中心に置いた劇を作成した。

以下に、劇の①テーマ、②場面のタイトル、③劇の要点を記すとともに、発表した劇の流れを簡単にまとめる。

①テーマ
「安心・安全な生活の確保」
②場面のタイトル
「あなたの身近に薬剤師」
③劇の要点
・薬剤師へのアクセスを簡単にする
・IT ツールを活用する
・遠隔地への医療提供

劇の流れ

ある日のこと、岩手県のとある山村に暮らす 3 才の子を持つ主婦は、掃除をしていた時にお腹が痛くなり苦しんでいた。病院や薬局に相談に行きたいけれど、幼き子がいることもあり、家を空けることもできずに倒れてしまった。そして、救急車のサイレン音だけが鳴り響いた。

その痛ましいニュースを知った薬局の薬剤師は、あるアプリの導入を考えた。上司に、ニュースのこと、アプリのことを説明し、導入を検討してもらうのであった。そのアプリとは、音声だけで、「痛い、痛い。」という声だけで、自動的に薬局の薬剤師とマッチングしてくれるというものである。テレビ電話形式で薬剤師の顔を見ながら、気軽に相談できるというものであった。

3 カ月後、山村に暮らす主婦が腹痛に苦しんでいた。夕食後ということで、近くの病院も薬局も閉まっている。すぐに病院に行ける状況ではない。そんなとき、見ていたテレビの CM でアプリの存在を思い出す。

実はこの主婦は、以前、なんとなくそのアプリをダウンロードしていた。そのアプリを起動したものの、「痛い。」と腹痛に苦しんでいると、スマートフォンの画面に薬剤師が映った。自分は薬剤師であると名乗った薬剤師は、薬局での対応のように丁寧に相談に乗ってくれるのであった。「本当に困っていた。ありがとう。」と感謝する主婦であった。

こうして、薬剤師の迅速な対応により、主婦の命は助かり、この山村の未来は明るくなった。

（終わり）

劇のまとめ

ここでは、劇のポイントとなるキーワードについて説明していく。

山村に暮らす

→これは医療の地域格差を伝えるために設定した。何県であるかは重要ではなく、山村ということで車がないと薬局や病院に行けず、気軽に行けるものではないということを表現した。

3 才の子を持つ主婦
→環境としては病院や薬局に行きやすかったとしても、主婦で幼い子どもがいるために家から出にくい状況なども実際にはあると考えた。遠隔地以外でも、このアプリが活用できるということを示している。

ニュースを知ったある薬局の薬剤師
→実際にそのニュースを知り、薬剤師が自らの意思でアプリの導入を上司に提案し、検討する。これこそが、「社会のニーズに応える」ということであると考えらえる。

アプリの導入
→私たちの班で考えたアプリは、難しい操作は必要なく音声で反応するものであり、テレビ電話のようにスマートフォンの画面に薬剤師の顔が映るというものである。薬局に電話で相談するのとは異なり、顔が見えることで利用者に安心感を与えることができるというものにした。
→このアプリの導入により、遠隔地に住む人も、事情があり外出できない人も、薬剤師へのアクセスが容易となる。

感謝する主婦
→アプリを利用した主婦からの「ありがとう。」という言葉、この言葉 1 つで薬剤師が社会のニーズに応える行動をしたということが理解できる。

最後に

限られた時間の中で、IT ツールを導入した将来の医療の形、そして、それが存在することでどう社会に貢献するのか、これらを伝えるために、どのような流れのストーリーにするのか、これが非常に難しい点であった。表現をするということの難しさを実感する機会となった。

私たちの班では IT ツール、そして、劇中では取り上げなかったが、ドローンでの医薬品の運搬・提供を行ってはどうかという意見も出ていた。また、他の班では業務のロボット化が取り挙げられていた。各班の発表を通して、これらの技術と人が上手く共存していくことが今後の課題であると感じた。機械化が進むことは悪いわけではないが、それを過信しすぎることも望ましくない。人にしかできない事と機械に頼ってもいい事を明確にし、より良い医療を提供するために望ましい形を追求していく必要があるのではないかと考える。

ⅢＢ班

第二部セッションⅠにおいて「これからの薬剤師に求められる社会のニーズ」というテーマのもとＫＪ法を用いて意見を出し合い、島を作成して整理した。セッションⅡでは、自分たちのＫＪ法のプロダクトを参考に10年後・20年後の将来を想像しながらシナリオを考案し、「社会のニーズに真に答える薬剤師を演じる」劇を発表した。

【議論の経緯】
セッションⅠの議論では、社会のニーズに関して以下の島が作成された。

① 信頼関係
→ 機械化（ロボット化）が進み利便性が向上すると想定される未来で、顔色・声色などヒト対ヒトという間柄でしか分からない部分に気付く力がさらに必要となる。
② 地域教育
→ 一般人（健常人）と来局者（患者）ではそれぞれ薬剤師と対話する目的や求める情報が異なるため、かかりつけ薬剤師としてそれぞれにあったものを提供するための知識や地域との関わりを持つ必要がある。
③ 超高齢化社会
→ 今後も在宅医療が推進される流れにあるため、患者さんが自宅で最期まで生活するために薬剤師が求められるものはさらに多くなると想定される。
④ 多職種連携
→ 院内でのチーム医療として連携を行うだけでなく、在宅医療と関連して病院薬剤師と薬局薬剤師の薬－薬連携がより求められる。
⑤ 学び続ける薬剤師
→ 10年・20年先には最新医療が今以上に発展していると想定されるため、研究分野でも薬剤師の力が求められる。

これらの島の中から、議論の中心となった「ロボット社会」を核としてシナリオを作成することとした。

【プロダクト概要】　　タイトル　：　ロボットにできない！！

在宅医療を受けている患者とその家族が主人公となり、1 回量の処方薬を正確に出してくれる便利な在宅ロボットが一家に一台置かれている近未来が舞台。
これまでは病院からまとめて処方された薬を1回分ごとに分けて患者に渡す必要があり、家族にとっては負担が大きかったが、ロボットが管理する事で負担軽減につながり家族は喜んでいる。

ある日ヘルパーが訪問してケアを行っていると、患者が発熱を訴えた。ヘルパーと家族は微熱だったことから一般薬で対処できると考え、ロボットに症状を伝えて一般の解熱薬を取り寄せ、患者に飲ませた。本当に効くのか？という患者の疑問に対しロボットは「データ上では効

く」と回答し、そのまま処方した。

しかしその後、発熱は治まったが一般薬を飲み始めた日から激しい胃痛が生じた。そこで薬剤師と連絡を取り、薬剤師が薬の確認や患者からの聞き取りを行った結果、今回は一般薬による相互作用（胃粘膜障害）が疑われると判明した。

薬剤師が一般薬の服用をやめるよう指示した所、数日で患者の胃痛は治まった。
ロボットには見抜けなかった細かな症状や経緯を薬剤師が的確に見抜き、患者の健康を守ることができた。 End…

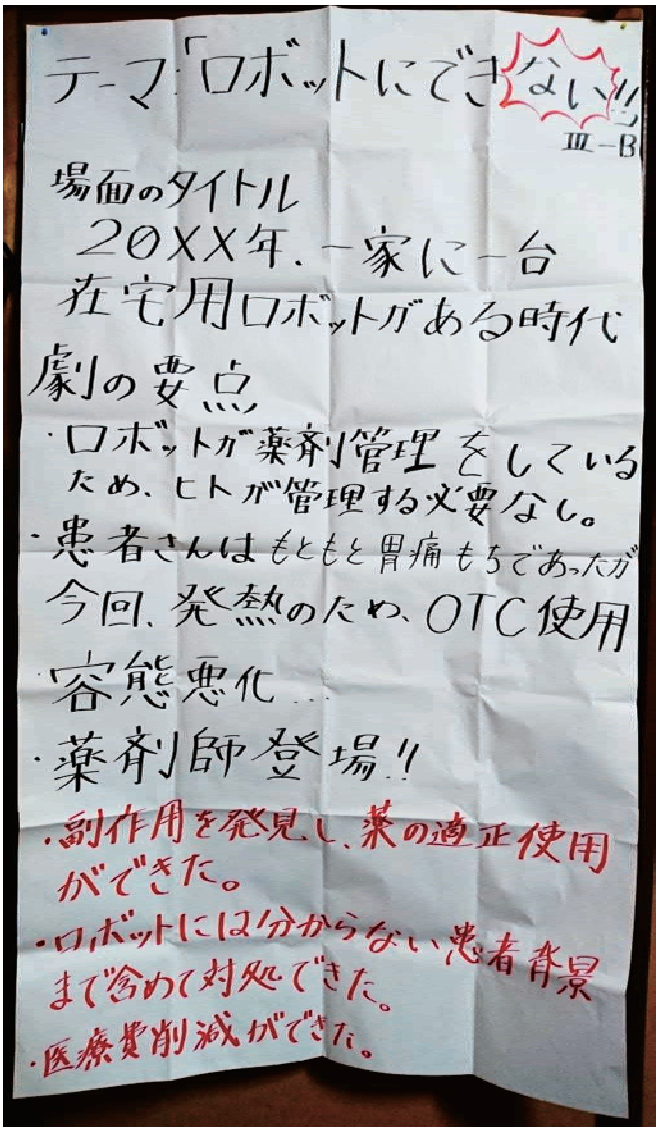
【結果】
本シナリオにおいては、ロボットが発展することによるメリットとデメリットを表現した。

メリット
- 家族の負担を軽減する
- 膨大なデータを持ち、統計的な分析ができる

デメリット
- 「発熱」などのキーワードのみで医薬品を選択し、患者の細かな背景や症状の経緯・言葉のニュアンスまでは反映し切れない
- データに存在する情報は提供できるが、それ以上の対応はできない

人々が利便性を求める中、特に待ち時間や薬剤の取り間違いなどが起こる場合のある調剤分野では、機械が行う方がその問題を解決できる可能性が高いため、今後薬剤師が必要で無くなる未来も考えられる。薬歴管理も一元化できるため、非常に有用ではあるだろう。しかし、データ上で既往歴や薬歴が記載されていても、患者が知りたい・知って欲しいと思っている内容は多岐に渡る。またシナリオでの「本当に効くのか？（＝自分に合うのか？）」の様に感情的な面も併せ持っており、患者は決して統計データを知りたい訳ではない。臨機応変に患者の知りたい気持ちに気付き、またわずかな表情や声色の違いに気付くには常にヒトとヒトとの関わりを持つ、所謂「経験則」が必要であり、それができるのは人間の薬剤師である。

今回のテーマを通して、機械に任せた方が良い面とヒトにしかできない面を細かく議論し、機械が発展し薬剤師の仕事が減る可能性も理解しつつ、その上でそれらとヒトが上手く共存しながら社会のニーズに応えていく未来を考える必要があるという結論に至った。



テーマ「ロボットにできない!!」

Ⅲ－B

場面のタイトル

20XX年、一家に一台
在宅用ロボットがある時代

劇の要点

・ロボットが薬剤管理をしているため、ヒトが管理する必要なし。

・患者さんはもともと胃痛もちであったが今回、発熱のため、OTC使用

・容態悪化…

・薬剤師登場!!

・副作用を発見し、薬の適正使用ができた。

・ロボットには分からない患者背景まで含めて対処できた。

・医療費削減ができた。

ⅢＣ班

第二部セッションⅠではKJ法を用いて求められるニーズについて話し合った。これを基に、セッションⅡでは10,20年後の将来を想像しながら社会のニーズを真に捉える薬剤師の姿を表現するために、劇を行った。

(行った作業)

・KJ法のプロダクトを見直した。

・KJ 法で整理した要素を踏まえた、社会のニーズを捉えた薬剤師が活躍する場面をイメージした上で、劇のストーリーの作成および配役の決定をした。

・劇を行った。

・テーマ決め

私たちの班では、表現するテーマを、コミュニケーションに絞った。これは、人と人とのコミュケーションがどの時代においても変わらず重要であるとともに、薬剤師として持つべき資質であると考えたためである。このような経緯から、劇のテーマは実際のニーズに近づけて、「私の想いを汲みとって」を採用した。

・劇に盛り込んだ要素

前述の通り、中心的な要素としてコミュニケーションを据えた。私たちの班ではコミュニケーションに対応するニーズとしては、「コミュニケーション能力」、「聞き上手」、「薬剤師同士のつながり」、「他職種との連携」、「少ない情報で状況把握」があげられていた。そこで、これらの要素を盛り込んだストーリーを組み立てることにした。また、他グループで挙がっていた「残薬の確認」のニーズが高まるという意見や「医療経済」に関するニーズ(GE薬など)がより高まるという意見に共感したため、これらの要素も組み込むことにした。

・シナオリ

[タイトルの決定]

私たちの班では、10,20 年後の社会ではロボットがより普及しているという考えに至った。そこで、劇においても薬剤師とロボットという対立軸を置くことにした。患者さんの微妙な顔つきの変化やしゃべり方を踏まえつつコミュニケーションするのは人ならではでないかという意見やこれに類する意見が多く出たことから、場面のタイトルとしては、「会話から患者の想いを汲み取って適切に対処する薬剤師」を採用した。

[劇の要点]

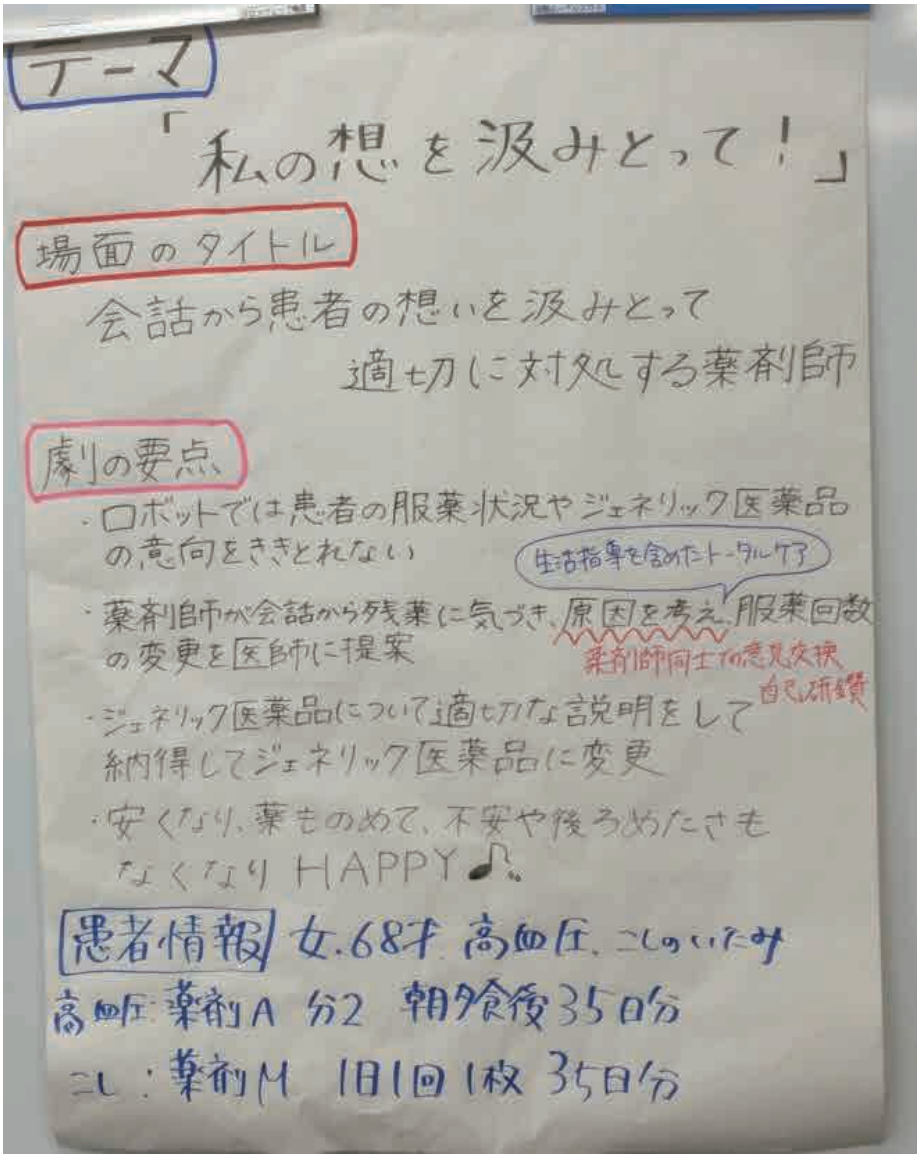
劇の場面設定に関しては、認知症の老人や子供連れのお母さんなど様々な意見が挙がった。5分という時間的な制約や盛り込みすぎると伝えたいメッセージが薄くなるという意見から、最終的には素直に自分の服薬状況を話せない患者さんが来局された時のロボットと薬剤師との対応の違いという設定にした。

以下に劇の要点を示す。

・来局した患者とロボットとのやり取り。ロボットでは、患者さんの微妙な顔の変化やしゃべり方の変化に気づけないため、患者の服薬状況や GE 薬の意向をつかみきれない。

・薬剤師の場合だと、直接的な服薬状況の聞き取りだけでなく、天候などの世間話から服薬できていないことや残薬の存在に気づく。また、服薬できるような工夫を考え、服薬回数の変更を医師に提案することにする。

GE 薬に関しても会話から変更しないのが適切な説明が不足していることが原因だと気づき、患者さんが納得できる形の処方(この場合は分割調剤)を提案する。

・患者さんは、隠し事をしている後ろめたさや不安を解消して、薬局を後にする。

(実際に作製したプロダクト)